
～。・風の歌・。～

サイキアスカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゝ。・風の歌。ゝ

【Nコード】

N5338A

【作者名】

サイキアス力

【あらすじ】

神々の戦い・今始まる！風歌は無事に命の神になれるのか？

・プロローグ・

「優しいんだね」

「気のせいだよ。ていうか、オマエ、いつまでここにいるんだよ？」

「……さあね？でも……」

「でも？」

「次の……」
「あまうた天歌」が吹くまでは、ここにいると思う」

「また天歌かよ……ていうか、天風って何だよ」

「天から聞こえる歌。それが吹いたら、きっとミシャーラに帰れると思う」

「あつそ。まあいいけど」

少年は、自分の部屋に入る少女に眼を向けた。

窓から入る風が少女の、どこまでも細い、透明に近い水色の髪を揺らす。手足も透き通るぐらい白く、細い。大きな眼は透き通るブルーアイ。

少女は、白く薄い長袖のカーディガンを着ていて、その下にやはり、水色で長袖のワンピースを着ている。後ろには青色の床に着くギリギリの大きなリボンがある。はだしたが、この季節は涼しいと感じるだろう。

少年は、ボサボサの茶髪。背は小さいほう。というより小さい。

しかし、少女と比べると、大きいので多少安堵している。しかし、二人とも12歳。で、しかも134センチ（少女は132センチ）。チビとからかわれるのがなれたころだった。

少年は秋風風黄^{あきかぜふうき}
少女は春風風歌^{はるかぜふうか}

二人とも、「風」の字が二つついている、なんともおもしろい名前をしている。

しかし、風歌の名前は偽名に近かった。

風歌は人間では無い。

風黄も最初聞いたとき驚いた。

「あのね、あたし、人間じゃないんだ」

そう言われたときは、風歌を外に出したくなった。

そして、病院行きだ。普通なら。

風歌が人間じゃないとわかったのは、あの変な術を使ってからだ。

風歌が風黄の前で手を回すと、なぜか、その周りに竜巻みたいなものが出来た。

流石に信じざるを終えない。

風黄はモチロン、普通の人間だ。

風歌によれば、風歌は「司神」^{つかさかみ}だという。

司神とは、何かを司る神だという。

そして、風歌は「風」を司る神だそうだ。

他にも炎・水・空気・闇・光・地・緑・雷、そして、命を司る神がいるそうだ。

その中でも、「命の神」は、重大だそうだ。

100年に一回、命の神を決める戦いがあるそうだ。しかし、本来、それは戦いになるはずではなかった。

「うゝん・・・光の神が逃げちゃったんだよね・・・」

光の神がなるはずだったのだが、逃げたらしい。

しかも、

「あたし、光の神、大っ嫌いなんだよね」

と、かなーり、眼が笑っていない笑いで答えてくれた。

理由はわからなかったが。

しかし、それ以上風黄が聞くことはなかった。

それは、この土日、部活をやっているサッカー部や野球部・バスケットの人たちが大勢飛ばされていた。そして、一瞬にしてどこかへ飛ばされた。

しかも、天候自体はいい物、風が普通に、台風並みに吹いている。むしろ、それ以上いくかもしれない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

光の神は、この世界に嫌気をさしたらしい。そして、天地門というところを通って、人間界に來たらしい。その後の消息はつかめていないらしい。

そして、光の神の力は強大であつた。その穴を埋めるには、それに及ばなくても少しの差なら平気だということで、七人の司神が集められた。

1・炎の神・エン

2・水の神・ウオウ

3・雷いかずちの神・ライ

4・風の神・フウカ

5・緑の神・リヨク

6・大地の神・ダイ

7・空気の神・ソラ

しかし、この候補に入れなかった神がいた。

それは、闇の神・ミヤであつた。

しかも、この世界。

男の神のほうで、力が強いということだったが、光の神と風の神は別だった。

この二人以外の司神はすべて少年。しかも、皆15歳以下と若い。そして、「天歌」というのは、現在の命の神が吹く、最後の歌だそ

うだ。

コレが聞こえると同時に、ここにいる司神は戦いを始める。
そして、刻々と時は迫っている。

「ねえ、風黄」

風黄が突然言った。

「なんだ？」

風黄は風黄の方を見る。

「あのさつ、あたしがもしこの戦いで死んでただの人形になっても
さ、大事にしてくれる？」

人形。

これは、神が戦いに敗れたとき、相手が望むと、今の状態で小さな
人形に変化する。

人形になると、二度と元には戻れない。

そして、喋れない。

大切な人とも喋れない。

風黄は、まず驚き、考えた。

そして、答えは
　　・・・

「わかんねー」

だった。コレを聞いて、風歌は笑った。

「じゃ、また聞くから・・・そのときまでに・・・答え決めてね」

ゝ。・ブローグ：ゝ（後書き）

下手です。

すみません。

でも、見てくれてありがとうございます。

く。・出会い&優しさ。く

出会いは突然。

本当に突然だった。

雨の中。

一人っきりの少女。

ずぶ濡れ。

大きな青色の虚ろな眼。

綺麗な裸足。

綺麗な髪は無残に汚れている。

肌も汚れている。

小さな唇は震えている。

そして、倒れた。

少年は慌てて駆けつける。

「おいっ！大丈夫か？」

返事はない。

少年は、今の自分の居場所へもって帰る。

小さく、可憐な容姿。

それは、天から落とされた神。

「ん・・・？」

少女が目覚めると、そこは明るい光が入る部屋だった。

十畳ぐらいの大きさの部屋には、茶色のシンプルな机とローラー付

薄型液晶テレビ・オレンジ色のマットの上に、ガラスの小さなテーブル・横にオレンジ色のクッションが二つ。壁には、制服と通学かばんが掛けられている。オレンジ色のタンス。床は白木フローリングで、壁はオレンジ色。そして、今自分がいる、オレンジ色の布団が掛けられたベッド。

少女はそう思った。

「そういえば……」

「オマエ、反応遅いな」

「わっ！ 誰・・？」

「ああ？オレ？オレは秋風風黄。12歳」

「そ……そうなの？」

「そうだ。オマエは？」

「え！？あ……あたしはあ……そ……そう！春風風歌！」

「そうだって何だよ……。まあいい、なんでオマエ、あそこにい
たんだ？」

「あそこ……？あ、門前ね……」

「はあ？」

「えっ……ん？……あれ！？あなた……人間！？」

「あ？何言ってるの？オマエ、どうかしてるぞ」

「だ・・・だつて・・・」

「だって？何だよ」

「あのね、あたし人間じゃないんだ」

[illegible]

「言ったとおり、あたしは人間じゃない。神様」

「か・・・神？嘘だろ？うさんくさい」

「・・・・何？証拠、見せようか？」

「え・・・・？」

風黄が声を上げると同時に、周りの視界が揺れた。
いや、揺らいでいる。

風によって。

風歌は手を振り回している。ために休むと弱くなり、強く回すと強くなる。

「う・・・うわあっ！なんだ！？って、家具がやちゃめちゃ！？しょ・しょうがない・・・信じるから・・・！信じるから止める！」

「ホント？」

「お・・・おうっ！男にみごんはねえ！」

その瞬間、ふっ、と風がやんだ。

「・・・・・・」

少年絶句。少女満足。

そのとき、

こんこんと、ドアをノックする音が聞こえた。

「ハロー　　風黄いるか？？」
はじめゆづし

風黄の親友・一祐二だった。

「うわっ！隠れる隠れる！」

かなり小声で風歌にいう。そして、ダンスの中に押し込む。
パタンと、ダンスの扉が閉まると同時に、祐二が入ってきた。

「よおっ！って・・・変な格好してるな・・・何だ？新しいエクササイズか・・・？部屋も汚いし・・・」

祐二は苦笑い。風黄は、もつと苦笑い。

「まあいい、オマエさ。彼女いる？」

「はあ！？」

「頼むよ　　困ってるんだ！！」

どこがだよっ！

「演劇部でさ、カップル役があるんだけどさ・・・それに当ては

まる男&女がないんだな〜。で、男役はオマエでさ」
何故にツツツツ!?

「女の子、いないか?」

演劇部のことは演劇部で解決しろよ。

「オマエなら、10人ぐらいいるだろ?」

一人もいません。ていうか、んな、浮気しねーし。

「ほらほら 白状しろ!」

することもねー!

「いねーよ。ったく、さつさとあっち行け!」

「またまた〜 いるんだろ?」

「いない」

「う・そ・つ・き」

キモい!!キモすぎる!

こんなキャラだったか?

「あのさ、いないからさ。さつさとあっちいてくれる?」

「……………オマエの相手役、あの植木鈴子でいいのか?」

「嫌だ。ていうか、オレやらねーし」

「すまん。もう、登録した」

ふざけんじゃねー。

本人への確認は?

「頼むよ〜植木は嫌なんだろ?」

確かに。

キモい。

アイツ。

アイツとやるぐらいなら、さっきの女でも……………。

ん???

女?

アイツ…………。

いるじゃん。

やるの??

突然、頭に風歌の声が聞こえた。
実際には喋っていないのだが。

それ、楽しい? 楽しいならやりたいな
この能天気め。

でも、丁度いいな

「あー・・・いいのがあるぞ」
「マジか!？」

途端、祐二の目の色が変わった。

「あ・・・ああ・・・まあ・・・な」

「じゃ・・・じゃあ、明日、つれてきてくれ!」
といい、祐二はすたこらと去って行った。

「やったぜ 説得完了 脚本考えるぞ!」
と言う、祐二の声が廊下に響いた。

「ふうっ・・・きつかったあゝ・・・」

風歌はそう言っ出てきた。

「ねっ、あたし・・・出れるの?」

風歌はそう聞いてきた。

風黄は、こくん、と頷く。

そして言った。

「迷惑掛けんなよ。アイツ、きっと一生懸命やってるからな」
風黄はそういい、立ち上がった。

「あっ、どこ行くの?」

「トイレ」

「そっか」

二人の会話はそこで途切れた。

風黄が出て行ってしばらく。

風歌は優しく、そして小さく呟いた。

「やっぱ、優しいじゃん。人間は」

そう言うと、風歌は笑った。

「ミューラ・元気かな？」

風歌はそうも呟いた。

そして、やっぱり優しく笑った。

風黄が帰ってくると、風歌はベランダの手すりに腰掛けていた。

「うわっ、危ないぞ・・・？」

「平気 平気 だって、落ちそうになったら、風で・・・ね？」

「聞くなよ。オレだってしらねーよ」

「そっか、そうだね」

他愛のない話。

外では、かすかに優しい風が吹いている。

その風は、風歌の綺麗な腰までありそうな長い水色の髪を揺らし、ワンピースの長いリボンも揺らす。風歌は蒼い眼を細める。

そして、翌日。

「風黄ー！！！！つれてきたかー！！？」

「・・・・・・今何時だよ・・・・。って、まだ三時じゃねーか・・・・しかも午前・・・」

風黄は重たい瞼を開けてドアに向かう。

一方、さっきの大声で目覚めた風歌は髪をとかし、ベッド（風黄の）から降りる。

ガチャ、とドアを開けると、そこには演劇部部員の人、総勢10名が衣装や台本を持っていた。

「………さよなら」

風黄はボタン、とドアを閉める。

「はい！？待って！開けて！演劇の発表会、明日なんだよ！早くしないと！」

「……なんでもっと早く……見つけなかったんだよ……」

「風黄……？」

風歌は風黄のそばまで来る。

「ん？あ？ああ、風歌か……？」

「眠そうだね……て、あたしも……同じかも……」

二人は、うとうとしながら、話す。

そして、外にいた演劇部員は、風歌の声を聞いて、強制的に中に入った。瞬間、

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおっっっ！」

叫んだ。

流石に二人も耳元で叫ばれると、眼が覚める。

「ん！？何だ！？うるさい！？」

「ひいひい……鼓膜があ……」

「風黄！ちよつと来い！」

「ん？　　て……オイ！？」

風黄は祐二（他多数）によって、廊下へと連れ出された。

残された風歌は何もすることがないので、とりあえず、着替えた。

オレンジ色のパジャマのまま、廊下へと連れ出された風黄。

ただえさえ、いつもボサボサなのに、寝起きと言っことで、更にボサボサ。

「なんだよ・・・」

「オマエ、いつあんな可愛い子見つけたんだ!？」

「・・・いとこだよ・・・」つか、オマエら来るの早すぎ」

「気のせいだ! まあいい。劇の名前でも教えとくか・・・」

「何だ?」

「美女と野獣」

ガッ、と風黄の蹴りが祐二のすねに当たる。

「う・・・嘘だ・・・」ロミオとジュリエット」だ」

ガッ（恋愛物が嫌い）

「す・・・すまん・・・では・・・」なんでも学校」」

「な・・・なんだ? それ」

「あ・・ああ・・なんでもアリの学校の生活を描いたものさ」
つまらなそ・・。

「自給１０００円」

「乗った」

「よし。じゃ、個性的なキャラを集めるぞ！さあ、行くぞ！」
個性的なキャラ・・？

「つて、あつ！」

そんなことを考えているうちに、祐二達の姿は消えていた。

「はえーな・・つて、うおいっ！？風歌！？」

「何？どうしたの？」

「どこ行くだよ！」

「えっ？あたしはただ、シャワーにでも？」

風歌はそう言つて、すたこらと走つていった。

「シャワーなあ・・つて、今思えば、ここ“男子寮”じゃねーか・・」
「

「じゃ、ついてきてん」

「うわっ！つて、オレ着替えてねーよ」

「じゃ、着替えて 早く」

「わ・・判ったよ・・」

「ったく・・なんでオレがこんなことを・・？」

「ごめん！でも、我慢して」

大浴場から、風歌の声が聞こえる。

一方、風黄は大浴場と脱衣場を仕切る、一枚のドアの前で腕を組んで待っていた。

というより、見張っている。

ぶつぶつ文句を言っているが、しっかりこなしている。

えらい。

「んじゃ、出ようかな？」

風歌の声が聞こえた。と思つたら。

ガラッ！

と、ドアがイキオイ良く開いた。

「どあぁっ!？」

そのイキオイで思わず後ろを向いた風黄は

・・。

「!？」

見とれた。

綺麗な線で、膨らんでいるとはいえない胸。
白く透明な細い肌。

きれ・・・。

しかし、それは危険な合図だった。

一瞬にして、目の前が真っ暗になった。

「あゝ・・・ごめ・・・」

「・・・・・・」

「ごめんってばあ・・・」

「・・・・・・」

反省の色を顔に浮かべている風歌と、無言のままの風黄。

その後、風歌は驚きで、この脱衣場で巨大な竜巻を起こした。

風黄はそれに巻き込まれ、頭に巨大なたんこぶを作った。

「ごめん！ホントにごめん！」

「・・・・・・」

風歌はどうしようかと迷う。

そのとき、ドアが開いて、例の“個性的な人たち”が入ってきた。

「なんや？おうっ！可愛い子やないか・・・って、風黄・・・そのこ

ぶは何や？」

少し怪しい関西弁の根岸誠也^{ねぎしせいや}13歳のこにん。男。

「痛そうですね〜」

可愛いというこゝとで有名な愛坂未由^{あいさかみゆ}12歳。男。

「あ〜・・・これは・・・」

がり勉的存在の松島薫^{まつしまかある}14歳。男。

「大変だなあ〜何？覗きでもしたかあ？」

バカの木村信悟^{きむらうしんご}14歳。男。

「あの・・・大丈夫でしょうか・・・？」

優しい野原麻由美^{のほらまゆみ}12歳。女。

の五人。+演劇部員（祐二他A〜I）10人。+風黄・風歌。

そして、練習が始まった。

それは、もう本当に適当だった。

ある程度台詞を覚えるだけだった。

他はもう瞬時にそこで考える。

そして、それは辛いものではなく、楽しいものだった。

祐二いわく、

「演劇はみている人が楽しいだけじゃない。この場にいる人がみんな楽しくなるようにすればいいんだ。そうすれば、ただ面白いじゃなくて、心から面白いと思えるんだ」

だそうだ。

風黄はほとんどツッコミ役だった。

といより、配分が決まっているかのようにだった。

ツッコミ役 風黄・麻由美

ボケ役 風歌・誠也・未由・薫・信悟
だった。

そして、

あははっ。

あつ、コケた！

ん？なんだ？えっ！？水のオケ！？って、うつわぁ～・・・
楽しいね！

むしろ、可笑い！

不満の言葉が一切ない、歓声が上がった。

もちろん、濡れたのは未由。

泣きまねで、女性のハートを見事にキャッチ。

薫の理論的な意見に、まじめに考える人もいた。

風歌の容姿は男性陣のハートをキャッチした。

麻由美は、ドジってコケた。

とにかく、楽しい話になった。

やっているほうも、見ているほうも、きっと楽しめたと思う。

「　楽しかったね！」

「そうだね」

ワイワイと盛り上がる、ギャラリィ。

出演人&スタッフも盛り上がっている。

興奮が冷めない、世界。

翌日。

寮長に話をつけて、風歌は風黄と一緒に住むことになった（なつてしまった）。

引越しの荷物の整理中。

風歌は突然言い出した。

「優しいんだね　ちゃんと、友達のことを考えてあげられてるんだもん」

「はっ？」

風黄が風歌を見ると、風歌は優しく笑った。

「そんな風になれるといいな」

ゝ。・出会い&優しさ。ゝ（後書き）

長い！そして、話が飛びすぎ！

すみません！

すみません！

これから、頑張ります！

く。・戦い始めようよ・・・。

「ありがとおっ！」

「いえ、どーいたしまして」

ようやく引越しの片付けが終わったところ、風歌が言った。

部屋は今までの部屋より、6畳ぐらい広い部屋に変えてもらった。

そして、それを半分に分ける。

と風黄8畳・風歌8畳になった。

仕切りは、一枚の大きな白い布。

しかも、風歌の家具はほとんど（というより全て）青系の色。

風黄の家具はほとんど（同じで全て）オレンジ系の色。

「なんというか・・・」

「しっかり分かれてるね」

感想はこうだったが、とりあえず、全ては終わった。

はずだったが・・・。

リリンッ リリンッ
リリンッ リンッ

と、綺麗な鈴の音がした。それに続いて・・・

ピロロリ〜 ピロロリラ〜
ピラピー〜 ピ〜ラピラ〜

と、透き通るような笛の音が鳴った。

「・・・・・・・・天・・・歌・・・・・・・・？」

「あん？天歌??」

その瞬間に事は起こった。

突然、風歌の目の前に、魔法陣が出来た。

「移動魔法陣!？」

するとそこから、ぬつ、と人の手が出てきた。

「うわっ・・・」

「ひいつ・・・」

そして、それはだんだん出てきた。

出てきたのは・・・ 一人の少年だった。

真っ赤なつんつんに尖った髪と眼。焼け焦げた服。美少年並の顔だった。

「久しぶり、フウカ・・・」

「・・・・・・・・エン？」

風歌は少年に尋ねる。少年はこくり、と頷く。

「・・・・・・・・言っとくけど、戦うなら外でお願いします」

「はい」

風歌はまるで、生徒のように返事をした。

「誰？オマエ」

エンと呼ばれた少年は風黄を見つけ尋ねる。

「んあ？」

「ああ、秋風風黄。あたしを助けてくれた人！」

風歌は楽しそうに言う。

「ふん・・・」

エンはそう言って、風黄を見る。そして、

「オマエ　チビだな」

「うるせー！（怒）」

第一印象がコレだったらしい。

風黄はすっかり、エンを嫌っている。

風歌は仲直りさせようとしているが、無効。

「あゝあゝ・・・」

風歌は諦めた。

そして、エンのほうを見ると言った。

「エンが此処に来たって事は、戦い　だよね？」

エンは、大きく頷いて、

「モチロン。まあ、オレとしては戦いたくねーけど」

「あたしも同感。けど、やんなきゃいけないんだよね」

同じ格好をして、ため息をついている二人を見て、風黄は、

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

何もいえなかった。

内心、神ってこんなキャラだったか？と思う。

しかし、流石にこのままではいけないので、渋々戦い始めようとしている。

が　・・・。

「ふっふっきっ！遊ぼうぜー！！」

いつもながらハイテンションな少年・祐二。

「うわっ、来た・・・」

風黄は呟いて、ドアを開けようとする。が　。

「・・・・・・・・・・・・・・・・何してんだ？」

二人を見る。二人は、風黄の部屋で喋っている。

「あのさ、せめて風歌の部屋で待機してくれよ。オレの部屋だと、見事な誤解&勝手に連れ込んだということで、寮長&寮母さんに怒られる。ちなみにキミらもね」

「はーい」

「はーい」

生徒だ。

先生の言うことを素直に聞く（はずもないが）生徒だ。「怒る」と言う単語は効いたようだ。

そして、くだらなく風歌の部屋に入る。

そして、同時に。

「風黄！ー！！」

と、ドアがイキオイよく開かれた。

ドアの外には、祐二&個性的な四人が揃っていた。（がり勉は部屋で勉強中）

みんなおしゃれな格好をしている。

「風黄！みんなでどっかいかねー？」

「遠慮しとく」

と、いいドアを閉めようとしたとき、

「なんや！？ノリ悪いなあー」

「そうですよー、行きましようよー」

「そ・・そうですよ・・行きましようよ・・ね？」

「行かなきゃ、変だ！」

一体何事だ。

「ほら！みんな言ってるんだ！さっさと行くぞ！ついでに風歌たちの服なども買おうぜ！」

「はあ？なんでオレま・・・」

最後まで続かないうちに、風黄は祐二に連れ去られていた。

「いいか？風歌っちだって、いつまでもあんなワンピースで過ごせるかっての！」

「本人が嫌がってないんだからいいんじゃないの？」

「いいや、違う！」

「なんでだよ！」

「さあ？」

「……とにかくオレは行かない」

二人のこそそした話は他人から見れば変だった。

まあ、いつものように、どうせ祐二がやったのだろと思う人が99.9%だ。

後の1%は祐二本人だ。

ようやく話は終わった。

どうやら、祐二は説得できなかったようだった。

続いて、未由。が、うるうる光線失敗。

続いて、誠也。が、無理矢理作戦失敗。

続いて、信悟。が、お笑いでは連れて行けないことが判明。失敗。

ラスト、麻由美。が、コレが以外に・・。

「ね？行きましようよ。風歌ちゃんだって、“女の子”なんですからあんなワンピースじゃ嫌ですよ」

「だって、“女の子”ですから、おしゃれだってしたいですよ」

「“女の子”は可愛くなりたいですよ……ってもともともかもしれないけど……だから、もっと可愛くなりたいですよ！」

女の子という単語&女でしか無いとわからないという気持ちを押しつけて押しまくった結果。

「わ……わかりました……」

麻由美勝利、風黄敗北。

「じゃあ、用意してきてくれ！」

がつくり、と肩を落として部屋に向かう風黄。

そして、中に入ると、二人が結果を待っていた。

「・・・・・・・・・・行くことになった」

「負けたのか!？」

「アレを聞いて見る。死ぬぞ」

「じゃ・・・・・・・・じゃあ、行けるの!? あたし!」

「・・・・・・・・まーな」

「えー!? オレ一人!?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・忘れてた・・・・・・・・」

ガチャ、とドアを小さく開けた風黄は顔が半分出ていた。
栗色の眼が見える。

「あのさ、オレの友達が来るんだけどさ・・・・一緒にいいか？」

外の人物は考えた。結果は、

「OK!」

だった。

「お待たせ」

「こんにちわあゝ」

「どうもっ」

風黄はいつものワンピース姿。エンは風黄に貸してもらった(たいして背は変わらなかった)赤いパーカー&オレンジのTシャツ&黒いズボン。

風黄は黒い髑髏マークつきキャップ&長め(といよりでかい)の黒い髑髏マークつきの半そで&やっぱり真っ黒で髑髏マークつきのだぶだぶズボン。

「なんか、髑髏が多くねーか？」

エンに聞かれて、風黄は、

「どーせ、渋谷でも行くんだろ？」

その問いに、外の人はずいいた。

「だからだよ。オレの姉がそこで働いていてさ〜・〜・たたく、渋谷あたりに行くときは、このマークつきの着てかないと・〜・殺される」

「えっ・〜、もしかして・〜お姉さん・〜あの「DOKURO」の店員さん？」

「んあ？店長」

「！！！！？」

その場にいた人（神除く）が硬直した。

「あのDOKUROの店長！？」

「DOKURO？」

「えっ？風歌ちゃん知らない？あのね、渋谷最強の「髑髏」をモチーフにした服とか売ってるかなりスゴイお店だよ！」

「へえ〜・〜」

「じゃ、お姉さんがそこにいるならそこへいこう！」

「ん？は？え？待て！オレはぜってー嫌だ！」

「・〜・〜・〜・女の子なんだけど〜・〜」

「わかりました」

風歌の言葉に風黄は素早く頷いた。

くすくす、と麻由美は笑う。

「あら？風黄じゃないの〜！久しぶりね〜・〜・って、ずいぶんと多くのお友達ね〜・〜うまくいってるのね〜・〜お姉さん、嬉しいわ！」

「こんにちわ」風歌。

「どうも」エン。

「初めまして」麻由美。

「こんにちわ」未由。

「どうも」誠也。

「こんにちわ」「祐二。」

「ハロー」です!」信悟。

「こんにちわ、みなさん」

と、風黄の姉、秋風紫苑あきかせしおんは笑いながら言う。

そして、

「今日は何しに来たの?」

と、営業も忘れない。流石、店長。弟の友達が来たにもかかわらず。

「姉ちゃん、コイツの服だって」

「コイツ? ああ、この・・・可愛い子ちゃん! ? いいの! ?」

「やるとは言つてねーぞ。服、どうにかしろだよ」

「まかせて! ていうか、他の子もどうぞ! 今日、新作が入ったの!

あたしデザインのね! そうだ、風黄、今セール中なんだ! あのさ、

後で暇だったらお願い!」

「・・・何を?」

「セールしてるって、宣伝してきて!」

「さようなら」

「・・・全部、あんたに払わせるよ・・・?」

決め手だ。

「・・・はい」

ゝ。・戦い始めようよ。・。ゝ（後書き）

読んでくれてありがとうございます！

ていうより、戦い、始まりませんね。

ダメちゃん！

すみません。やっぱし、コメディーに変えようかな？

でも、頑張ります！

く。・仕事&ライト。く

「えっと、キミ・・・名前は？」

「・・・春風風歌です」

「風歌？風が二ついてるのね、って風黄と同じね。仲良くしてね」
「は・・・はい」

風歌は紫苑につれられて、奥の試着室に連れてこられた。

薄暗い倉庫を通り過ぎると、そこは綺麗な服が揃う倉庫だった。

「わああっ・・・！すごい！」

「そう？ありがとうねっ！っていうか、風歌ちゃん可愛い！もう、特別にあたしがコーディネートしてあげる〜！」

といい、呆気にとられている風歌を残して、紫苑は奥へと消えていった。

そして、しばらくして・・・。

「じゃ、じゃ、じゃ〜あんっ」

といいながら持ってきたのは、風黄が着ていたのと色違いの服一セットだった。

流石にズボンではなくミニスカだったが。

「色はこの中から選択して頂戴 そうそう、ついでにこれも〜」

「・・・コレ・・・ですかい？」

風歌は差し出されたものをまじまじと見つめる。

「そう コレですよお」

「マジっすか・・・？」

「ったく〜・・・遅い！」

「すまん！」

「ごめん！」

「ごめんなさい・・・」

「ドンマイ！」

「平気やる？」

と、誤る個性的五人組み。

「そういえば・・・エンは・・・？」

探すと、案外近くにエンはいた。

ベンチに座って、眼を閉じている。

「？」

風黄が不思議がって近づくと、エンは風黄に気づいた。

「オイ、風歌は？」

エンは風歌の姿が見当たらないのを不思議に思っているらしい。
だから、考えてたのか・・・？

「・・・アイツなら、姉ちゃんに連れられて、奥の試着室に」

「ふゝん・・・で、オマエは何してるんだ？ていうか、暇じゃねーか？」

「そうだな、暇だな・・・！！！」

ピンツ、と風黄の頭に何かが思いついた。

そして、にやり、と笑う。

「な・・・何だよ・・・」

「いやさ・・・ちよつと付き合ってくんない？」

「いつ・・・？」

「うん。似合うわ！」

「ど・・・どうも・・・」

風歌が着ているのは、さっき出された謎の服だった。

風黄の服と似ている服は、先ほど試着が終わったばかりだった。

そして、さっきの服に合う靴や小物までくれた。

代金はと言うと、「大丈夫 無料よゝん それに万が一、払っても
らうのは風黄だから」だそうだ。

そして、今。

風歌が着ているのは、青色で髑髏マークがついている　ロリータ服だった。

後ろには、恒例の長すぎるリボン。フリルがそこらじゅうについていて、ブーツもフリルつき。カチューシャにももちろんフリルがついている。髪は、左右両サイドをフリルのリボンで結われている。スカートが異様に短い気がするが、そこは気にするなどのことだった。

イメージは、“風”だそうだ。

確かに、少量の風で、リボンやフリルなどがふわふわ動く。それはそれで、可愛い。

しかし、恥ずかしいものは恥ずかしい。なのに

「姉ちゃん！」

と、風黄の声がするではないか。

しかも、エンまでいる。

ヤバイ！

とつさに隠れようとしているが、ガシツ、と紫苑に掴まれた。

「あれ？どうしたの？もしかして恥ずかしい？」

「もちろんです」

即答した。紫苑は、あははっ、と笑った。

「大丈夫よ。どーせ、あの子たちも恥ずかしい思いをすることになるんだから」

「・・・はい？」

「ふふふ　ちよつと待っててね」

紫苑は男二人の元へ行った。そして、強制連行。

「・・・」

そして、しばらくして。

「姉ちゃん！やめろ！つか、早く脱がせろー！！」

「風黄ー！！どうにかしろよー！！」

「・・・えっ？」

入ってきたのは・・・風黄とエン。

しかも、風歌と同じような服。というより、タキシードを改造して、今風に感じた。

二人は、風歌を見つけた。

『えっ?』

「何・・・紫苑さん・・・って、あの二人もって・・・このこと!?!」

「そーよ　これで風歌ちゃんも恥ずかしくな〜い!」

「何?風歌もやられたのか?」

エンが聞く。

「・・・まあ・・・ね」

「どう?このコーディネートはあ?」

「ん?オレ?オレか!?!」

風黄は自分を指され、慌てる。

う〜ん、と唸ってから言った。

「いいんじゃない?」

「やっぱし!?!」

紫苑は喜んで喜んで喜んだ後、三人を外へ連れ出した。

そして、大量のビラを三人に渡した。

「コレ、配っておいてね〜」

『ええっ!?!』

みごとにハモった。

が、紫苑はすたこらと去って行った。

「どうすんのぉ〜・・・?あたし、この格好、恥ずかしい!」

「同感」

「右に同じ」

「じゃ、早く配ろっよ!そして、早くこれ脱ぎたい!」

「オッケー」

そして、ビラを平等に分けて、一番、通りの多い場所へと向かった。

「どうぞ」

「はい」

「貰ってください!」

三人の声は、人々に届いたのだろうか。

いや、届くまでもなく・・・

「それ、頂戴!」

「DOKUROのチラシ!? 頂戴!」

「キミ、可愛いな」・・・ビラ、頂戴!」

DOKURO流石。

渋谷あたりでは、もう有名になっている。

開始から一時間もしないうちに、ビラは全てなくなった。

「よっし! 帰ろう!」

三人はさっさと帰ったが、

「じゃ、次これね」

この服を脱いでもいいよ、という言葉ではなく、仕事が待っていた。

「!!!!!!」

次の仕事と言うのは、倉庫から足りなくなった服を取りにいくという仕事だった。

「コレ終わったら、脱いでもいいよ」

『乗ります』

意見は同じ。しかし、コレを脱いでもいいのは、仕事が終わるまで。

仕事 店 終わりまで。

気づいたのは、もう始めて数分たったところだった。

「姉ちゃん・・・・・・・・」

「しょうがないね・・・・・・・・」

「あゝ・・・・・・・・!」

エンが何かに気づいたように、顔をあげる。

「!」

続いて、風歌もあげる。

「ん？なんだあ？おつ、一人の少年がこちらへ向かって来ておりますな」

風黄が突然、何かを見たようかのように言う。

「そうですね……って……!!!!!!!!!!?」

「オマツ……人間か!？」

「なんだよ・・」

二人は、風黄を驚きの眼で見る。

一方、なんで驚いた眼で見られるのかが判らない風黄は首をかしげる。

「だ・だつて・あれは・一応、普通の人間じゃ・判らないんだよ・!？」

「じゃ、普通の人間じゃないんじゃない？」

風黄は普通に言った。

「だって、人間だって言ったじゃん」

「普通のとは言っていないけど？」

「えっ……？じゃ……オマエ、普通じゃないこと……わかってんのか！？」

「モチロン。だって、ここに生まれてからずっと知ってるからな」

「『三』……？」

「そ、ココに生まれてから」

「紫苑さんは知ってるの……？」

「まさか、あんな普通の人間＆ワケのわからないやつにわかるかっての」

風黄ははあり、とため息をついた。

「知らない？」

風歌は眉を寄せた。

「・・・・・・・・・・なんか、嫌な感じがする・・」

「え？」

「だろ？だって、オレさ」

言葉が終わらない、その瞬間。

バンツ、と倉庫の裏口のドアが開いた。

そこにいたのは、少年。

さらさらの金髪&汚れた肌の少年。きっと汚れてもいなかったら美少年として、紫苑にやられていただろう。

「何してる？エン」

少年は、冷たい声で言う。

「ラ・・・・・・・・ライトツ！？」

「嘘・・・・・・・・ライト！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・戦うなら本当に外でな」

風黄はそう言つて、倉庫を出た。

そして、近くにあつたダンボール箱に座る。

「！」

ふと目の前にあつた、長い綺麗な栗色の付け毛が眼に入った。

「似てる・・・・・・・・・・・・・・・・な」

風黄はそう呟いた。

「エン、オマエはなんのためにココに着たんだけ？」

「・・・・・・・・・・いいじゃねーか、オレの勝手だろ・・？」

「だから、オマエはオレに勝てないんだ。今までも、これからも」

「・・・・・・・・・・うるさい。ていうか、オマエなに気取ってんだよ」

「フン、自分が出来ないからと、嫉妬か？」

「ライト・・・・・・・・オマエ・・」

「ほら、抑えて抑えてっ。風黄のところいこうよ」

風歌が慌てて抑える。こんなところでやったら、周りの人まで巻き沿いだ。しかし、

「逃げるのか？」

余計なことおゝゝゝ！！

風歌はキツ、とライトを睨む。

その視線に気づいたのか、ライトが風歌を見る。

「フウカか・・・いや、今は風歌か・・・」

ライトは、そう言った。

「ねえ・・・」

「わかつてる」

ライトはもう、戦いはじめている。

先ほどから微かだが、手に電気を走らせている。

そして　刹那　・・・。

瞬時にライトが飛び出した。ものすごいスピードだった。

「くっ」

「ちっ」

二人はよけるのが精一杯だった。

そして、微かに、二人の服に切れ目が出来た。

「速い・・・っ」

「なんだ・・・？アイツ・・・何か・・・憑いている・・・！？」

「何か・・・？・・・判らない・・・っ」

「そうだろ？オマエたちには絶対わからない。これは　・・・」

ライトの言葉は最後まで聞こえなかった。

それは、この爆発のせい。

「始まった」

風黄は、びっくり、と体を止める。

そして、音のするほうに向かう。

「　　そうだ・・・」

風黄は付け毛を手にとった。

「これ、便利なんだよな。いろんな意味で」
風黄は、すたこらと音のするほうへ行った。

「みんな、どんな反応するか、楽しみだ」

ゝ。・仕事&ライト。ゝ（後書き）

下手下手下手。

もう、どうにでもしてください。

でも、点数いただけるとうれしいです。

一点でも。

それでは。

みてくれてありがとうございます。

く。・そこにいたのは：。く

「よ、つと」

風黄は今の爆発で転がってきたダンボールをよけながら、倉庫へと向かった。

「うう・・・」

「つてー・・・」

風歌とエンは間一髪でダンボールの山に隠れ、直撃を避けたが、爆風で、10メートルほど飛ばされた。

「何だ、まだ生きてたのか・・・」

ライトは、驚いたような顔で二人を見る。

「つつ・・・生きてたのかつてね・・・縁起の悪いこと言わないでよ！」

風歌は立ち上がり、ライトへ指を向ける。

その後に、エンが立ち上がる。

そして、エンは手をぎゅつ、と握り締め、手を開いた。

すると、なかには手のひらサイズのかなり燃えている火の玉が現れた。

そして、エンはそれをボールのように投げる。

それは、見事な曲線を描き、ライトに向かう。そして・・・

ポオオオンツツツ

と爆破した。

「くつ・・・」

ライトは顔の前で手をクロスさせる。

「どうだっ！オレだって、だてにかみさまやってんじゃねーんだよ！」

そう言うのと、エンはまたさつきと同じ動作を繰り返した。
ポンッポンッポンッと、投げられる。

ライトは隙を見て、その場から移動する。

「オイッ、風歌！オマエも戦えよ！」

「え．．．うゝん．．．嫌かも．．．」

「はあい？何言ってるんだ？」

「その通りだよ、あたしは．．． 戦いたくない」

「．．．．．．．．．．」

「何だと．．．？」

二人は絶句した。

「だって、戦いで神を決めるなんて．．．変だよ！」

「けどな．．．決まったもんは．．．しょうがないんだ．．．」

エンの言葉に、風歌は、

「決まった？だったら、やりたい人だけやればいいじゃん！あたしはやりたくない！反逆者でもいいし、裏切り者でもいいし、なんでもいい。けど、やりたくない！」

「オマエ．．．何言ってるんだ．．．そんなの無理に決まってるだろ！？」

ライトもそうとう動揺している。

戦いの最中にそんなことを言われたら、驚くだろう。

「やりたくない、か」

「！……いい？」

「誰だ！？．．．ん？．．．は？」

「あ　　って……えっ!？」

「何？」

そこには、栗色の長い髪の子がいた。

「ええええつ！？光の神！？」

「.....!？」

「何で！？ええっ！？」

「……驚きすぎじゃない？大体

•
•
L

! ! ! ! ! ! ! ! ? ? ? ?

三人が同時に驚いた。

そこにいたのは

•

•

•

ゝ。・そこにいたのは：。ゝ（後書き）

あゝうゝ・・下手。

成長しないですネゝ・・・。

いいかげん、成長しないと・・。

後、見てくれてありがとうございます！

く。・戦いなんて。。く

そこにいたのはなんと。。。

するっ。。。

と、付け髪が取れた。

「え。。。。ツラ。。？って。。風黄。。？」

「　　そうだよ。光の神は　　オレ」

新事実発覚。

「風黄。。女!？」

「んなワケねーだろっ！フリだよフリ！（怒）」

「あっ、フリね。。ビックリしたあ。。」

「おいおい、風歌。。驚くところが違うだろ。。。」

「なぜ。。オマエ。。いや、光の神がここに。。？しかも人間に生まれ変わって。。!？」

ライトが風黄に聞く。

「んあ？オマエ、ライトか？ああ、なーんにも変わっちゃいないな」
風黄が懐かしいものを見るように言う。

「答える！なぜ、オマエはここにいる!？」

「何でって？別に理由なんかいらなくねー？」

「オマエのせいで。。俺たちは。。。」

「何？闘う羽目になったとでも言うワケ？」

「そうだ!」

「あっそ。気にしないで」

風黄はそういって、ライトの言葉を流した。

「あっ」

そして、何かを思いついたように、風歌のほうへ来る。

「・・・風黄が光の神だったなんて・・・驚きだった」

風黄は答えることをしなかった。そして、

「改めて・・・初めまして　オレを嫌っているお嬢さん」

風黄はくいつ、と風歌の顔を右手で自分の顔のほうへと向けた。

「・・・初めまして・・・あたしが“光の神”を嫌っていることを知ってる“人”」

風歌は、嫌そうな顔をして答えた。

「よっぽど、アレを気にしてるんだ。・・・まあ、言っとくよ。アレはオレじゃない」

風黄は、言った。

「オレじゃない・・・？」

エンが眉を寄せて言う。

「あれは絶対、あなたよ・・・だって、そっくり・・・」

風歌も言う。

「そうだね、かなり似てるね。それは否定しないよ」

風黄は言った。

「オイ・・・戦闘の最中だ！邪魔をするな！」

そして、ライトはエンがやった動作をやった。

今度は、火の玉ではなく、電気玉だった。

「はあぁっ！」

!!

!?

たちまち、二人は巨大な電気玉に飲み込まれた。

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオンンツツツ

ものすごい音と、爆風が起こった。

• • • • •

風黄は目の前で起こったことをまじまじと見つめる。と、眼に何かが映った。

二人分の影。しかし、倒れている。

「ふん……死んではなさそうだ」

「……次はオマエだ……」

風黄が見ると、そこにはボロボロのライトがいた。

「オマエ……もう無理だ……」

風黄は言った。

「何を言っている……。二人を倒した後、オマエを倒すと言ったはずだ」

ライトは、肩で息をしながら言う。

そうとう、今のに気を使ったんだな……。あれじゃあ……。

ライトは、ぎゅつ、と手を握り、電気玉を作る。しかし、風黄は動

かない。

そして、しだいにそれはしぼんでいく。
その瞬間、ライトがバタリと、倒れた。

「あゝあゝやっちゃった」

風黄は、とんつ、と空中から降りる。

そして、ライトを肩に持ち上げる。

たたた、と店の入り口に持つて行き、駆けつけた救急隊員に渡す。
そして、また倉庫へと行く。

『ライト・・・オマエならなれるはずだ・・・“命の神”に・・・』

『そう・・・頑張つて・・・』

『みんなで、応援するわ』

『そうだ。オマエにはなれるその権利があるんだ』

『頑張れ』

『死ぬなよ！』

『“命の神”になれる、あなたなら』

何故、オレなんだ？

何故、やらなくてはいけないのだろうか。

何故、戦うんだ？

何故、哀しいんだ？

それは・・・自分が弱いからだ。

「！」

ライトは夜中、目を覚ました。
真っ白い壁も、黒に染まっている。
窓から入る、月明かりがここを病室だと知らせてくれる。
そして、同時に自分の本当の気持ちに気づかせてくれた。

本当は戦いたくなんかない。

「これが・・・オレの気持ち・・・？」

ライトは動揺する。

そんなわけではない・・・。今まで、そんなことはなかった。
戦いが楽しかった。戦いで“気持ちがまぎれた”・・・。

「!・・・」

「オレはホントは弱いというのか・・・？」

「そうだ。だから、オマエは“負けた”」

突然、窓辺から声が聞こえた。
風黄だった。

「負けた・・・？オレが・・・？」

「そうだ。その証拠に、オマエの本当の気持ちが勝った」

「・・・ん？・・・“あいつらに負けた”・・・じゃなく・・・“自分に負けた”とでも言うのか？」

「そうだ。ほら、負けたら本来、人形か力を失う・・・又は勝った相手の奴隷」

「・・・ふっ・・・負けたな・・・」

「だから、そう言ってるだろ？まあいい。オレは帰る」

風黄はそう言って、窓から降りた。

「・・・ここ・・・5階だよな・・・?」

ライトはそう呟いた。

そして、しばらくして布団にもぐった。

「風黄!どこ行ってたんだよ!」

風黄が帰ると、祐二が部屋の前で待っていた。

そして、叫ばれた。

「んあ?えーつとな、姉ちゃんたちと一緒に、あいさつ回り」

「だ・・・だけどさ!なんで風歌っちはあんなボロボロ&気絶してんだよ!?」

「歩きつかれて、寝てんだよ」

「服は!??ボロボロじゃねーか!」

「火事があつて、子供を助けようとして」

「そ・・・そうか・・・でも、危ないことすんじゃないぞ!ああ、もう。驚いたな・・・」

驚くのはこつちだ。

今、普通に夜中だぞ。

良く待ってたな。

風黄はそう思いながら、部屋の中に入って行った。

「ふう・・・寝るか・・・といつても眠くねーし・・・」

まず、風黄はよくれたこの今ドキタキシードを脱ぎ、部屋着に着替える。

そして、部屋を見渡し、机の中から、ヘッドホン&MDを取り出した。

そして、ヘッドホンを付け、音楽を再生し始める。

ベッドの上で、ごろん、と仰向けに転がる。

音量を大きくすると、チャカチャカと軽快なリズムになる。

すると、部屋を仕切る布がゆれた。

「・・・?」

風黄が体を起こすと、そこには、いつものワンピースに着替えた風

歌が立っていた。

そして、

「・・・！？ちょ・・・待て！ここでは・・・！」

風歌の手には、あの二人同様、風玉があった。

しかも、両手に。

「光の神・・・」

そう呟いた風歌は、風黄のほうへと瞬時にしてきた。

「光の神なんて・・・」

そっぴいながら、右手を後ろに下げ、左手を前に出す。

風玉が投げられた。

ゝ。・戦いなんて。。ゝ（後書き）

見てくれてありがとうございます。

そういえば。。。

戦いのシーン、意外に早く終わりましたね。

というより、飛ばしすぎ？

かもしれません。

これから頑張ります！

く。・攻撃・お置きき。く

「えっ！？ちょ・待て！」

風黄が放たれた瞬間。

風黄はシールドを発動した。それによつて、なんとか攻撃は防げた。

「あ・危ねえっ・っ・つて、風歌！オマエ、何すんだ！」

風黄はヘッドホンを放り投げ、風歌の元へいく。

「・・・・・・・・・・バカ」

「・・・・・・・・・・はい？」

突然、風歌がいった言葉に、風黄は眼が点になった。

「だから、バカって言ったの！」

「いや、それは分かったけど・・何故に？」

「人間つてさ、学校の授業で『酷いやツだ』とか言われてたんだ。

でもあたし、人間は優しいと思っただんだよね。なんとなくだけど」

「あのく??大丈夫・・・・??」

風歌が勝手に喋りだし、壊れたかと思う風黄。

「確かめたかったんだよね、本当に酷いのか。本当に残酷なのか。

で、こつちに來たんだよ。というより、無理矢理來ちゃったんだよ

ね。そしたら、失敗。見事に目的とは全然違ふところに来たんだよ

で、風黄に出会った。風黄に助けてもらつて今ここにいる。あの時、

会わなかったら、きつと死んでた。それには感謝してる。本当は人

間つてのは優しいつてわかつたから。でも、違つた」

風歌は、下をうつむいた。

風黄は「あゝ」と小さく呟き、苦笑いした。

そして、とにかくベッドに座らせて、落ち着かせる。

「・・・・・・・・風黄が光の神だなんて、知らなかった」

「そりやそうだ、教えてないからな。それに、最低限に気は抑えてたからな」

「・・・・・・・・光の神は、あたしのお母さんたちを “殺した”・・・・

「！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・えー・・・あー・・・

「ごめん」

風黄は、しばらく間をおいて、誤った。

本当は自分では無いのだが、とにかく誤った。

「・・・・・・・・・・・なんで・・・・・・・・？」

「え？」

「なんで？・・・風黄じゃないんでしょう？」

「そうだよ？」

「なんで、誤るの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・さあ？」

それは、風黄自身にもわからない。

「なんとなく・・・・・・・・でいい？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そうしとく・・・」

風歌はそう言い、ぱたり、とベッドに倒れた。

そして、しばらくして、小さな寝息が聞こえた。

「って　・・・風歌が此处で寝たらオレ、どこで寝るんだよ・・・

」

と、思いきや、もううつすらと明るくなっている。

「そーいや・・・休みじゃん・・・明日・・・じゃなく今日・・・」

風黄はそういい、そのまま　　床に倒れた。

ちゅんちゅん、と鳥のさえずり、そして、優しい朝日。

「んんんんんん！」

風歌はベッドの上で伸びる。

「ふあゝあ・・・って、ここ、あたしのベッドじゃないね・・・風黄のだし、風黄床で寝てるし・・・もしかして、あたしベッド取った？」

まあいつか。・・・ん？なんであたしこっちにいるの？昨日・・・？もしくは今日・・・何かしたっけ？帰ってきて、ベッドに寝て

風黄に攻撃しようとした！そうだ！そうだった！って、喜ぶこと

かなあ？」

一人でボケて一人でツツコム。

ノリツツコミだ。

そして、風歌は髪をとかし、風黄を起こしに行く。

「風黄くく！朝ですよくく！ご飯ですよくく！」

どんなに揺らしても、どんなに叩いても、どんなにビンタしても起きる気配なし。

「うん．．何？宙吊りでもして起こす？」

そのとき、風黄がうつすらと眼を開けた。

「．．．．．おはよ．．姉ちゃん．．．」

「えっ．．？寝言．．？」

風黄はしばらくぼーっとして、またねた。その前に一言。

「料理しないでよ．．．“また”爆破するから．．．姉ちゃん．．怖い！紫苑さん！前に爆破したの！」

そして、ぼすつ、と風歌の腕の中に顔が落ちた。

「ずわっ！何！？何でまた寝るの！？ていうか、あたし動けない！？とにかく、ベッドベッド．．．」

風歌は風黄を引っ張り、ベッドまで連れて行く。

そして、持ち上げようとするが、重くて持ち上がらない。

「ぐああ．．重ツツツ．．」

わずか数秒でダウン。

「うん．．．こんなときに技が使えたら便利なんだけどな．．．」

『いいか？部屋の中で、絶対に技を使うなよ！片付けるの面倒なんだよな』

という、忠告（一部愚痴）を受けた風歌は一応、守っている。が、
「すみません、部屋の主様！」

そう言って、風黄の下に風を起こし、持ち上げた。

そして、そのままベッドに落とす。

ドスツ、と落ちる風黄。

「あ・・落とし方・・荒かったかな・・？」

しかし、これでも起きない。いや、「うゝん・・」と唸った。
ある意味、感謝だね。

風歌は自分の与えられた部屋に戻ろうとした。が、

ガシッ

リボンを掴まれた。

「な・・何！？」

風歌が見るとそこには、自分のワンピースのリボンを掴む、この部屋の主がいた。

「ふ・・・風黄・・・お・・起きた？」

「・・・・・モチロン・・オマエ、落とし方荒すぎ・・鼻打った・・」

風黄はなみだ目で鼻を押さえている。

「あ・・ゴメーン・・で、放してくれない？」

風歌の頼みを風黄は無視。

「風歌、オマエ・・部屋の中で技使っただろ？」

ギクッ

「いや、気のせいだよ」

「じゃあ、なんであの高さから落とされるんだよ」

ギクリ

「も・・持ち上げた・・・！で、上に投げて落とした」

「ふゝん・・・本当？」

「も・・もちろん・・」

どう考えてもありえない言葉だ。

風黄は本当に信じているのか、それともからかっているのか判らないが、ゆつくりとリボンを放す。

「や・・」

やったー！と喜びそうになっただが、

「ふ・風黄の意地悪くく！！！」

「何？オレはちゃんと放したよ？」

風黄はうつぶせの状態で頬杖をついている。そして、その反対側の手で、

「でも、また掴んだー！！」

風黄は、いったんリボンから手を離れた。

しかし、また同時にリボンを掴んだ。

確かに、リボンは放した。が、コレでは、意味が無い。

「風歌、さっきの嘘だろ？」

「えー・そんなことないよー」

「・・どう考えても今のは棒読みだ・・それに　　・・」

「そ・・それに・・？」

「机の上が異様にぐちゃぐちゃなのは？」

「ま・・窓が開いてた！」

「すっかり閉めました。記憶に残っています」

ギクギクッ

「やっぱし、使っただろ？」

「・・・・な・・なんで、技使っちゃいけないの？」

ビバ・奥の手。

「ああん？」

「だから、何で使っちゃいけないの？」

「・・・嫌いだから。何だっけ？アレ・・そうそう、“波動”が」

「波動？」

「・・知らない？技を出した後、うつすら、波動があるんだよ。それが、びみよみよみよくくってなって・・」

「なにそれ・・びみよみよみよくくって・・」

風歌は呆れた、と言う顔になった。

「うーん・・とにかく、嫌なんだよ。あの感覚が・・味わってみればわかるさ。まあ、こんなところかな？」

「……ふん……」

「で、話戻るけどさ。やつぱ、使った？」

「………使った。持ち上げるために使った」

「やつぱし。さつきからびみよみよみよみよんって……」

「判った判った、びみよみよみよみよんね」

「うん、びみよみよみよん」

「判ってるびみよみよみよんね……って、いつまでもやっているとウザがる人もいそうだから止めましょう」

「はい、そうですね」

会話終了。

「で？」

しばらくの間、風黄は言った。

「オレ、言ったよね？使ったらお仕置きだって」

「はい、言いましたね。耳に残っていますよ」

「じゃ、何がいい？」

「どうせなら、何もなし」

「却下。……そうだ、今日オレ、廊下掃除だったんだ。いつそのこと、廊下掃除は？」

「………あの長

い、廊下をですか？一人で

？」

「もちろん」

「遠慮します。もつと手短で簡単なの」

「……お仕置き受けるくせに、要望多すぎ」

「いいから」

「宿題やったし、掃除も終わったし、買い出し行っだし、ほとんどやったし……」

「じゃあ、無し！」

「無理。ダメ。ふざけんな」

「ぶー！ケチー！」

「……そんなこと言ってる廊下掃除にするぞ」

「ごめんなさい」

おとなしくなつた風歌を置いて、風黄はなにがあつたかを考える。
そして・・・

「決まらない！むしろ、無い！」

「ヤッター！」

「・・・じゃ、そーいや、朝飯まだ食つてねーな・・・」

「だったら、買ってこようか？お仕置き分で」

「遠慮する。もっと面倒なのやらせる」

「ええー！？酷ーい！」

「うるさい！元はといえば、使つたお前が悪い！」

「知らないもん！」

「・・・じゃ、“氣”を分けてよ」

にやり、と風黄は笑う。

「・・・じゃ、氣・・・ですかい？・・・マジ？」

「マジ」

風歌は、引きつった笑いをし、風黄は勝ち誇つたような笑いをする。

「かみさまにとって、氣は命の次に大事なものだからな」

ゝ。・攻撃・お仕置き・。ゝ（後書き）

読んでくれてありがとうございます。

しかしながら、まことに下手でありまして（恐縮）
すみません！

この間、メールを貰いました。

それによると、あたしは直したほうがいいところがたくさんあるらしんで、頑張ります。

それでは、ありがとうございます。

く。・見舞い・お仕置き。く

「あのく・出来れば、それだけは・・・」

風歌の意見は、

「無理。だって、やることないし、なんなら廊下掃除でもいいけど？」

却下。又は、別の案。

「あーうー・廊下掃除は・・・ちよつと・・・」

「二択式で、どうぞ。10・9・8・・・」

「待って！それは酷い！せめて、20秒！」

「なーな・ろく・ごー・・・」

「ちよつと遅くなっただけ！？えー・・・！？」

「よ　ん・さ　ん・に　　い　　ち・・・」

「ううつ・・・じゃあ・・・どちらにしようかなっ！・・・“気”！?・・・」

「よし！決まり！」

そして、風黄は、そういえば、と呟く。

「風歌って、他人に“気”をあげたことある？」

「えっ？ないよ？」

「マジっすか？じゃあ、全部はもらえないな」

風黄は、腕を組む。

「って、全部貰う気？回復するの？」

「しない。普通の神は」

「普通の神は？」

「司神は一日で回復する」

「一日かかるんだ・・・」

「て、そくだよ！一日で回復するなら、全部すっちゃえ！」

「やめろー！あたしを一日動かなくする気かー！」

「かも」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

風歌は全てを諦めたような顔になった。

「大丈夫。最初は辛いけど」

「・・・・風黄、やったことあんの？」

「うん。もらった」

「あげたんじゃないの？」

「まさか。あげるなんてしたら、そいつがオレの“気”に絶えれず、爆破だよ」

「体が？」

「うん、体が」

「うわっ・・・」

「まあいいや、早くくれ！腹減ったんだよ！」

「・・・・うん・・・」

と、思いついた。

「風黄って・・・ここのご飯でも生きられるの？」

本来、神は神の世界の食べ物でしか生きられない。

もし、人間界に落ちてても、一応、世界各地に数え切れないほどの神の世界の食べ物売っている。それを探し、そこで買い、そして生きていくということになる。

幸いにも、この学園都市の中に、その店はあった。

風歌はそこで買って生きているが、風黄が買う様子など、一度も見ることがない。

風黄は、風歌を見て、知らない？と言う顔をする。

風歌は、縦に首を振る。

「あんな、オレ、一応ハーフなんだよな」

「ハーフ？何の？日本人とアメリカ人？」

「それで、神が生まれたら大変だよ・・・オレは神と人間の子供」

「へー・・・・・・・・何故に神と人間が結婚！？ダメなんじゃないの！？」

「それがさー、神の男が、皇子だったらしくてさー・・・結婚できた

らしいよ」

「なんて、図々しい．．ってことは、風黄つて王子様？」

「うん、そうだよ」

普通に言わないでください。

庶民のあたしが可哀想に見える．．。

「ま、“氣”早くくれよ！」

「うん．．」

やっぱし、庶民は皇室の使いなのね．．。

ふと、そう思う風歌だった。

「よっ！」

「．．．．．」

国立万石病院5階
まんごくびょういん

503号室。個室。

ベッドに一人の少年。そのワキにもう一人の少年。

ライトとエンだった。

「なんのようだ？」

「なんだよ、せっかく見舞いに来てやったのに」

「余計なお世話だ」

「．．．．．そのワリには、たくさんのお花さんが後ろで踊っていること」

確かに、ライトの後ろには、大量的に花があった。

『ライト君へ』や『ライト様へ』・『弟ライトへ』などと、たくさんの手紙とともに。

「うるさい、好きで貰っているんじゃない」

「じゃ、これも貰ってくれ！」

渡したのは、小さい花束。

「．．．．．」

「じゃ、渡したからな！オレ、風歌たちのトコ、行ってくるぜ！」

エンはそう言つて、病室のドアを開けた。
と、同時に閉めた。

「・・・何してる？」

「ギャラリーがたくさん」

エンはそう言つて、今度はライトに見えるように開けた。
その瞬間。

キャ

！！

という、歓声が上がった。

「閉める」

「了解」

パシンッ、とドアが閉められる。

「さあ、窓から出るか・・・。窓の下にギャラリーがいないことを願
うぜ」

エンはそう言つて飛び降りた。

「・・・ったく・・・本当にここは5階か？」

ライトはそう呟いた。そして、ドアの鍵をかけた。

「コレでしばらく安全だろう」

「んん〜！」

口をふさがれたまま、風歌は何かを言う。又は何かを言おうとして
いる。

「何言ってるかさつぱり」

風黄は悪戯っぽい笑みで言う。

「んんん〜！！」

「さあ？さつぱり？」

やはり、風黄は同じように返す。

「んんんんんん〜！！」

「何？」

「んぐう・・・って、オマエが離れればいいの！」

風歌は風黄をどかす。

「おつ、やつと聞こえた!」

「違う! 離さなかったのはあんただ!」

風歌はバツ、と起き上がる。

風黄はそれをよけ、ベッドの上で座る。そして、口の周りをぺろり、
となめる。

「ったくもゝ．．今叫ぶだけでも疲れるんだから!」

「．．それはどう考えても、自分の責任だろ．．」

「うるさい! 大体なんで．．」

「大体?」

「大体なんで」

「なんで?．．もしかして．．貰うのにキ．．」

真っ赤になりながら、風歌は猛烈な勢いで、風黄をぶった。

「いつてー! 何すんだよー!!」

「知らん! あたしは何もしてませんし、何も聞いてません!」

そう言つて、風歌は耳を塞いだ。

風黄は、ぶたれたところを抑えながらあぐらをかく。

耳を塞いだままの風歌を見て一言。

「ついでに、そろそろ、体動なくなるよ? 気がたりなくて」

「．．マジ．．?」

風歌は小さく呟いた。

風黄は、にやり、と笑った。

「ほうら、聞いてた」

「．．もしかして、嘘!?」

風歌はそう言つて、風黄の元へ行き、目の前から見る。

「今回は、もつと強くする．．っ」

風歌は怒りの炎が見えそうな勢いで、先ほどから用意していたこぶ
しを振り下ろす。が。

キシッ

。。

「え・・・」

風歌は自分の体が動かないことに驚いた。風黄を見ると、

「ほら、言っとくけど、今の嘘じゃないよ。オレがすった後、みんなしばらくしてから倒れるんだ」

と、言った。

叩こうと思い、出したこぶしがだらん、と下に垂れた。

続いて、体自身が、倒れていく。

ぼすつ、と風黄の腕の中に納まる。

「い・・・息が・・・苦しい・・・かも・・・」

風歌は途切れ途切れの言葉を発する。

「うん、苦しいかもな。一日中」

満面の笑顔で風黄は言う。

「この・・・あく・・・ま・・・あっ！」

「悪魔？一応、神様なんだけど。まあ、そういうことにでもしとくよ」

風黄はそう言っつて、風歌をお姫様抱っこの状態で、風歌の部屋へ連れて行く。

そして、ベッドに寝かせると、すぐさま部屋を出る。

「助かった・・・」

そう呟いた途端、ドアがイキオイよく開かれた。

エンであつた。

「よおっ！元気か？」

「ま・・・まあ・・・い・・・いや・・・あっ、元気・・・？」

「どっちだよ・・・まあ、いいや。風歌は？」

「寝てる」

「そーか、まだ寝てるのか」

「まーな」

風黄はそういい、安堵のため息を気づかれないようにつく。
あのままゆつくりしていたら、きっとエンに誤解されかねない。
しかも、息が荒い風歌の場合。

「こいつ・・・単純だからな・・・」

ぼそつ、と呟いたつもりだったが、エンには聞こえていた。

「だれが、単純だった？」

「ん？あ・・・聞こえたか？」

「モチロン。で、もしかして、オレのことか？単純って」

「モチロン・・・じゃねーっ！」

「ほお？オレのことか・・・風黄！！」

「うわっ！やめろ！ここでやるな！あつ、宿題が燃えた！」

いつまでも、平和でありますように。

これは、ここにいるみんなの願い。

「・・・う・・・る・・・さい・・・っ！」

風歌は聞こえないような声で言った。

ゝ。・見舞い・お仕置き：。（後書き）

すんません。

ちよつと、飛ばしすぎたかもしれません。

そしていつもいつもすいません。後になりましたが、
見てくれてありがとうございます。

これからもしよろしく願います。

風歌はベランダに出て、入り口を見るが、風黄が残したと思われる、ブレーキ後があるほか、何も無い。もしくは誰もいない。

「どーしよ……一時間目は……体育だから、流石に筆箱は使わないよね……？」

風歌は考えたあげく、届けることにした。

真っ白い部屋。

一人の少年と、一体どれだけあるんだと思うほどある花束の山。

少年のそばには、小さい花瓶。

その中には、小さい花束。

少年は呟いた。

「………暇だ……」

そして、もう完全的に治った腕の傷などをみる。

多少の痛みはあるが、しっかりと動く。

そして、少年は、パジャマから普段着に着替える。

病院のほうで洗ってくれたので、綺麗になっている。

そして、病院の代金（家から送ってくれた）をベッドの上におき、窓から出る。

すたっ、と地面に着くと同時に……

キャ

ツツツ！

と歓声が上がった。

そして、看護婦が病人を置いて追いかけてきた。

何十人も。

「どーして、こうなるんだか……」

少年はそう呟いた。そのとき、眼の端に、蒼いものが移った。

「………風歌……？」

少年は、風歌に追いつくようにスピードを上げた。

「あれ？ライトじゃん。傷、治ったの？」

「まあな。それより、どこ行くんだった？」

「ん？風黄に忘れ物持っていくの。一緒に来る？」

風黄の問いに、

「暇だからな」

少年はそう言った。

追っかけの看護婦は院長に怒られていた。

「おおお！？風歌とライトじゃねーか！」

「あつ、エン！」

「エンか・・・」

「何しに行くんだ？」

お決まりの言葉。

「風黄に忘れ物を届けに行くの。ど？一緒に来る？」

「モチロン！」

そして、三人は風黄の通う学校へと走っていく。

「・・・・・・・・ペンケース・・・ねえ・・・」

風黄はギリギリで間に合った。

そして、忘れ物には、机にかばんの荷物を移している最中に気づいた。

「お・・オイッ・・今日、テストじゃねーか・・」

祐二が驚愕の顔になる。

「あ・・ああ、ヤベえ・・でも、ま・・一時間目は体育だし・・」

「二時間目だぞ。テスト」

「・・・・・・・・・・そうだな」

二人は会話を終わると、更衣室に向かった。

そして、体育が始まると・・・

「よっしゃー！祐二！パスッ！」

「おしっ！任せろ！」

そして、バスッ、とゴールにボールが入り、ピピ

笛が鳴る。

ッ、と

「よっしゃ！祐二、ナイスパス！」

「風黄こそ！ナイスシュート！」

すっかり、忘れ物のことなど忘れていた。

「そうですか、では、秋風君の教室は、4階です。えっと、1-4
ですね」

「ありがとうございます。じゃ、急げ！」

「おうよ！」

「ったく・・・」

三人は、常人ではありえないスピードで階段を上っていった。

「速いわ・・・」

受付の女性は呆気にとられた。

ダダダダダダダダダダ

と、三人は4階へ一気に上りついた。

「後は、1-4を探すだけ・・・っと、あれ？祐二？？」

「何だ？知り合いか？」

ライトが聞く。

「うん、風黄の友達らしいよ」

「へー・・・じゃ、アイツに聞けば？」

「そうしよう！」

風歌たちは祐二のもとに行った。

「あれ？風歌っち」

「どーもっす！風黄、知らない？」

「風黄？ああ、きつとそろそろ更衣室から戻ってくるよ。で、どう
したの？」

「忘れ物届けに来たの」

「忘れ物？ああ、筆箱か・・・って、風黄だ！」

「おい！何してんだ？」

風黄は、体操着袋を持って教室の前まで走ってきた。

「おおつ、風歌とエンとライトか……で、何の用？」

「忘れ物。はい」

「……ペンケース！サンキュー！助かったぜい！」

風黄はそう言つて、筆箱を受け取つた。と、同時に。

「コラッ！そこ、何してる！？チャイムはなつたはずだぞ！？」

と、怒鳴る声が聞こえた。怒鳴つたのは、二十代前半当たりの青年だつた。

「うげ……オレ、中入るわ……」

祐二はそそくさ、と教室に入つて行つた。

「あ……矢幡先生……すみません……忘れ物を受け取つていたんで……」

風黄は、引きつった笑顔で答える・

「何？何を忘れたんだ？」

「ペ……ペンケースです……」

「ほう、で、そのキミたちが届けてくれたと？なるほどよくわか……つた……」

「………どうも」

風歌は、上目遣いで（ただたんに背が低いだけ）で矢幡を見る。

「えー……どうも。キミは……フウカ……ちゃんだよね？」

「ええ、今は風に歌と書いて風歌ですけど」

風歌は、満面の笑顔で。矢幡は風黄と同じように引きつった笑みで挨拶を交わす。

「何？知り合い？風歌」

「うん、あつちのね。家が隣同士だつたんだ。本名はケイシ・エメルトン・キオラ・ヤハタだつたような気がする」

「正解です。よく、覚えていらつしゃいました」

矢幡は、敬語で言う。

「いいです。ここでは、敬語を使わないでください。それと、早く授業を始めないと。テストなんじゃないんですか？」

「ハッ、テスト！そ……それじゃ……また！ほら、秋風君、中に入

って!」

「は・・・はい・・・じゃ・・・どーも・・・」

「うん、バイバイ」

パタン、とドアが閉まる。

「オレらの出番なかったな」

「暇つぶしにはなかったがな。で、どうするんだ?」

「何が?」

「この後だ」

「この後? そうだね・・・ この探検でも行かない? 姿隠して」

「賛成。楽しそうじゃねーか!」

「そうだな、暇つぶしにはなるな」

「じゃ、決定。どっか隠れて、姿隠そう!」

三人は、階段の陰に隠れた。そして、姿が見えないように、魔法をかけた。

「ホント、神が魔法使えるなんてな」

「オドロキだね。魔法使いだけかと思ったのに」

「神は不可能なことはないというワケか・・・」

「でも、まあ、とにかく役に立ったよね。まあいいや、行こう! まず、一階から!」

三人は、しずかに、そろりそろり、と進んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

風黄はその様子を見ていた。

姿見えないのに、なんでここそこする必要があるんだか・・・。

「ふう・・・」

息をついて、テスト用紙に眼をむけ、答案用紙に答えを書く。思ったより楽だ。

これなら、上手く行きそうだ。

全てそうだったらしいのに。

そう思うときもある。

どうやら、この戦いはそうは行かないみたいだな・・・。

教室の窓から数メートル離れたところに、黒い影が一つ。そして、カラスが一羽。

黒い影は、にやり、と笑った。

「良くわかつているな・・・光の神・・・」

そして、黒い影は、揺らいでから消えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

風紀の横を通りかかった矢幡は、足で少し机を蹴る。

小さくガタツと揺れる。それに気づいた風黄は、矢幡の眼を見る。

来たな・・・。

そうですね・・・。もしかして、神殿隊？

そうだ。光の神・・・。

ご存知でしたか。まあいいです。

わたしは今から、応援を呼びます。

わかりました。

二人の眼での会話は終わった。

さあ・・・来てみる・・・ミヤ・・・ッ！

風黄はそう思った。そして同時に、他の司神に願った。

どうか、アイツを倒してくれ、と。

ゝ。・暇つぶし：。ゝ（後書き）

見てくれてありがとうございます。

そして、ちょっと理解できないところがありましても、広い心で見てください。

ということ、ありがとうございます。

「なぐにしてるのかな？」

優しいような声。

がしっ、と風歌の腕が掴まれる。

「ひいっ！」

「ひいっ！って何だよ……ていうか、オレ悪党じゃないんだからさ……もしかして、戦いのことを心配してる？大丈夫、こんなところでやらないって！」

リヨクはにこやかな笑顔で言う。

「ホ……ホント？」

「うん、大体こんなところでやって、人を殺したりしたら命の神にはなれないよ」

「……そうだった」

「忘れてたぜ」

「確かに……」

「って、フウカだけじゃなかったのか！？エンに……ライト！？」

「よっ！リヨク」

「久しぶりだな」

リヨクは隠れていた二人を見つけ、風歌を見る。

「まさか、勝ったのか？」

「ん？エンとは戦ってないよん　ライトは力使いすぎて倒れちゃった」

「……で、今ここにいるワケか……」

「そつ。リヨクは戦う気、ある？」

「うん、あるよ。今戦りたいけど、無理だからな」

「そうね、やられる前に逃げるわ！それじゃ！」

風歌たちはすぐさまその場を去った。

「あつ……」

リヨクは呆氣に取られていたが、いつの間にか自分の友人がいなくなっていたことに気づいた。そして、同時にチャイムがなったのも気づいた。

「うわっ！急がなくちゃ・・・！次体育だ・・・っ！」

リヨクはそう言つて、駆け足で教室に戻つて行つた。

「・・・・・・ヤバイ・・・」

屋上に一気に駆け上つた三人。

「なんだ？風歌・・・」

「何がやばいんだ？」

風歌が顔を青ざめていることに気づいた二人。

「だってさ、リヨクが此処にいるってことは、寮に住んでるんでしょ？」

「そりゃそうだろうな。ここは全寮制だからな」

「そうらしいな」

「あたしき、ここに住んでるからさ、見つかったら・・・」

「ヤバイな」

「そうだな」

「・・・・・・嫌だあ・・・まだ死にたくないっ！」

「いや、死ぬとは限らないだろ」

「アイツのことだ、人形にはしないだろ」

「そうかもしれないけど・・・」

「あつ、いた！発見しました！矢幡先生！」

ドアを開けて入ってきたのは、風黄。

「そうか、ありがとう！風黄君！君は伝えてくれ！」

「判りました！」

風黄は三人ももとへ急いでくる。

「ど・・・どうしたの？」

「何か・・・あつたのか？」

「そうだ！大変なんだ・・・」

「大変？だつたらあたしたちもだよね」
「は？」

風黄は息を切らしながら聞き返す。

「うん、リヨク見つけたの」

「バッドタイミング！」

風黄は頭を抑える。

「で、そっちは何？？」

「ん？ああ、ミヤだ！ミヤが来たんだ！こっちに！」

「ミヤ？あの・・闇の神の？」

「そうだ！あの闇の神の！」

「風歌様！エン様！ライト様！風黄様！」

「あつ、矢幡先生」

風黄は、手を振る。

「えっ！？矢幡？つて、神殿隊いっぱい！」

「四人とも、平気でしたか？」

「ああ、大丈夫です」

「そうですか、それはなによりです」

「あの・・話がまったくをもつて見えないんですけど」
「でしょうね」

「いや、でしょうね、つて・・」

矢幡は後ろの神殿隊を並べ、自分は膝間づいた。

「わたしたちは、神殿隊、銀ランクのものです」

「矢幡、神殿隊だったの！？しかも銀ランク！？」

「はい、風歌様がここに降りてからなりました」

「オイ、風歌・・神殿隊銀ランクつて・・」

「うん、すごいよ・・」

「三人とも、ちゃんと話を聞いとけよ、神殿隊が来るほど大変なんだ・・」

「判った」

「しーがねー」

「そうだな」

三人が黙ると、急にこの場は静かになった。
逆に怖い。

「いいか？よく聞け！じゃ、まず、ミヤが候補に入れなかったことは知ってるか？」

風黄が静かになったトコロで言う。

「うん」

「モチロン」

「知ってる」

「そのせいかなぜかは知らないけどな、司神を狙う事件が起こるんだ。他にも神狩りとかな・・・」

「神狩り・・・？」

風歌は、つぶやく。

「で？」

「ああ、それでな、ミヤは七人のうち、もうすでに三人やっているんだ。で、残るは四人。緑と雷と炎と風！地と空気と水は今はまだ力を使えないが、もう回復してるそうだ。・・・ってなに“チッ”とか言ってるんだよ風歌・・・」

耳の良いヤツめ！

「で、まあ、次に狙うのは残る四人のうち誰か。幸いにもこの学園のなかにいるらしい。んでもって、さっきミヤを見た」

「見たんですかい！？」

「ああ」

「矢幡まで！？」

「・・・大変なことになったな」

「そうだな・・・ミヤと戦うことになれば・・・」

待つのは“死”！！！？

「嫌だ！」

「確かに！」

「まだ死にたくない！」

「いや待て。だから、神殿隊呼んだんだろーが！」
風黄が呆れ顔で言う。

「え？神殿隊、出来るの？」

「だーかーらー、下級神殿隊じゃなくて銀ランクをこんなに呼んだ
んだろーが！」

「そうなの？じゃ、安心ね（きつと！）」

「風歌・今オマエ、心の中で“きつと”って言ったか？」
エンが小さく耳打ちする。

「まあね・・・」

「うん、確かに安心できないよな」

屋上のタンクの上。

真っ黒い少年とカラスがいた。

『だってよ、オレたちの“気”にも気づかないんだぜ？』

カラスは面白そうに笑う。

少年は、大きな真っ黒いフードを深くかぶっているが、その下では
笑っているのが判る。

「風黄たちも気づいてるのにな。まあ、ワザと気づかないフリして
るけどな」

少年は、そういい、カラスに言った。

「じゃ、次の獲物は
うだ．．！」

風歌だ。結構、周りのヤツラが騒ぎそ

少年は、先ほどと同じように揺らいでから消えた。
その場には、風黄たちの声が響いた。

ゝ。・発見・重大な話：。ゝ（後書き）

見てくれてありがとうございます。

ちよつとやっぱし、話が飛んだような気がするんですが、すみませ
ん。気にしないでください。

そして、またまた最後に

見てくれてありがとうございます。

また見てくださいね。

く。・ミヤ登場。く

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

気づいたか？」

エンがライトに小さく耳打ちする。

「モチロンだ・・・」

ライトも小さく答える。

その横の風歌も風黄も深刻な顔をしている。

神殿隊は何も感じていないようだった。

「で、矢幡。どうするの？」

風歌が不安を隠すようにして、話し始める。

「はい？ああ、そうだな・・・神殿隊は、この学園の周りの警備を強化します。あなたたちはとにかく・・・・・・・・いつでも戦えるようにしてほしいです」

矢幡はそう言つて敬礼をした。

「それでは、失礼します。何かあったら連絡を・・・てまあ、風黄君に頼んでおけば大丈夫だけどね・・・風黄君の担任だからね」

「そうなの？まあいいわ・・・じゃ、あたしたちは・・・逃げるわ！」

「そうだな！」

「右に同じ」

そう言つて、三人は屋上のフェンスを跳び越して、下に降りた。

それと同時に、屋上に上がってきたリヨク。

「あゝ！逃げたか・・・って、神殿隊！？・・・しかも銀ランクう！？」

リヨクは目の前にいる神殿隊、約五十人を目の当たりにし、数歩下がった。

「・・・・・・・・リヨクか・・・」

風黄はつぶやいた。

「うつ．．．だつて、風黄大変じゃん！」

「ココの小学一年生の問題ができるかどうか分からない基礎知識のないやつに教えてたらな．．．自分の勉強も出来ねーよ」

「．．．．．言つたね？？」

「ふつ．．風歌．．あ？？」

「必殺、彫刻等投げ」

しゅしゅしゅしゅしゅしゅしゅしゅつ、と近くにおいてあつた彫刻等が飛び、エンに向かっていく。

「どわあああああああああつっ！」

「危険だな」

いたつて冷静なライトはそれを交わす。

ととととととと、とエンの体の形を描いて壁に刺さる。

「．．．．．」

失神しかけのエン。

キレた風歌。

見守るライト。

変な三人。

「言つとくけど、力は使わないでよ」

風歌は言った。

「つ．．．．．使つたら？」

エンが恐る恐る聞く。それに風歌は満面の笑顔で、

「殺す」

といった。

「はい」

エンはすっかり恐縮している。

「．．．．．情けない」

ライトはつぶやいた。

「なあなあ、風黄！」

屋上、昼ごはんタイム。数組のグループが昼食を食べている。
その中に、風黄＆祐二の二人はいた。

「何だよ……」

風黄は嫌そうな顔をし、祐二を見る。

「その玉子焼きくれよう!!」

「……遠慮する。ていうか、オマエ、キャビア入ってんじゃないかよ！」

「は？玉子焼きの方が美味そうだ！」

「……変なヤツ、だったら作って入れるよ」

「……だってよお・母さん、毎日持ってくるんだぜ？
言えないよ」

「そうだな。じゃ」

そう言つて、風黄は玉子焼きを、ぱくつ、と口に入れる。

「あああ
ツツツ!?オレの玉子焼き
iiiiiii!!」

「誰がオマエのだ。オレの弁当の中に入ってたんだからオレのだよ」
風黄はそう言つて、もう一つの玉子焼きも食べる。

「ああああああああああああ……」

祐二は叫んでから倒れた。そのとき手から離れた弁当箱を風黄がキヤツチする。

「なんだよ……明日でも作ってきてやるから……」

「マチツ!?やったー!!」

祐二は弁当箱を持っていたらこぼれるというほどに、回った。
そして、酔った。

「うええええええええええ……気持ち悪……」

「アホか……ていうか、回っただけで酔うか?普通」

屋上の風が髪を揺らす。

ついでに、祐二のナフキンが飛んでいった。

「えー、只今より、エンの処刑を始めます。参加者はあたしとライトです。で、処刑道具はノコギリです」

「エン、なんて無様だ・・・」

「いや！助けるよ！なんで鎖がここにはあるんだよ！」

「100円ショップで購入いたしました。ノコギリも」

「一体どこの100円ショップだよ！？」

「この学園都市の中です。まあ、早速はじめましょう。ライト、手を押さえて」

「・・・・・・・・・・」

ライトは手を押さえる。

「待て待て待てえ！早まるな！」

エンは暴れるが、残念。動けません。

「では、はじめます」

「ギャ

ツツツ！！」

エンの首まで刃が後、五ミリ。

と、同時に、部屋のドアが開き、風黄が帰ってきた。そして、見た瞬間に、

「どわああああああああっ！風歌あ！？」

「あっ、風黄。お帰り。処刑、見る？」

「見ない！そして、離せ！」

「嫌」

「否定するな！」

風黄はとにかく、エンを安全なところに移す。

「たたたたたたた・助かったぜ・・・」

「大丈夫か・・・？眼が泳いでるぞ・・・？」

風歌はノコギリを横に置く。

「なんで邪魔するの？」

「いや、ちよつと違うだろ！？」

「そう？まあいいや。あっ、そうだ。昼ごはんまだ？」

「は？昼飯？食ってねーの？」

三人は同時に頷く。

「じゃ、買ってくるよ」

「あつ、あたしも行くっ!」

「じゃ、待っててくれよ。あ、技他多数は使うなよ」

そう言つて二人は外に出た。

それから刹那　　・・。

「ただいま!・・って、うおう!？」

風黄が帰ってきた。

『はっ?』

二人は目が点になった。

「オマエ・・今、風歌と外行つたんじゃねーか？」

流石にエンもオドロキで正気に戻っている。

「なにいつてんだ?風歌なんて見てねーぞ」

「じゃ・・じゃあ、さっきのは・・?」

「さっき?何かあつたのか？」

「いや・・さっき風黄に化けている(?)が風歌と一緒に外へ行つ

たんだ・・」

「はあ?オレに化けた？」

「おう・・」

風黄は、呆れた顔になって、ピンツ、と何かを思いついたように顔をあげる。

「誰かの・・・気!？」

その瞬間、部屋に凄まじい爆風が起こった。

「うわあっ!」

「うわっ!」

「くっ・・!」

三人は、風によつて、壁に叩きつけられた。

「風歌!？」

窓の外にいたのは、真っ黒い影とカラス。そして　黒い影に首を絞められている風歌。

「久しぶりだな・・・エン・ライト、そして光の神・・・いや、風黄か？」

黒い影は冷たい声で言う。大きな黒いフードをかぶっている。フードを繋がっている黒く大きなパーカー、真っ黒なダブダブのワークパンツ。顔は見えないが、笑っている。

「うう・・・」

風歌がうめく。

「オマエ、ミヤだな!？」

風黄が叫ぶ。

「そうだ、風黄。オレがミヤ。このカラスが・・・別にいいか」

『よくねえっ! オレ様は・・・』

「何しに来た!? 風歌を離せ!」

『無視するなッッッ!』

「嫌だね、風歌は神狩りに使う。もしかしたら、同じ仲間同士で殺し合いになるかもしれない」

「そ・・・そんなことしない!」

風歌がミヤに向かって反抗する。

ミヤは風歌を見て、

「無理だ」

といった。

「なんで？」

「これを飲ませるからだ」

ミヤが取り出したのは、蒼いビー玉のような玉。

「これは、神を操る薬さ。結構強いから、一ヶ月は最低でも解けないよ。それに、これをのめばオレの言うことに素直に従う。たとえばこんなことでもね」

ミヤは薄く笑った。

『ミヤ、で、どうするんだ? 今飲ませるか?』

「・・・・・・そうだな、ギャラリーも揃ってるしな」

二人(?)は笑った。

「じゃ、まかせたよ」

『何！？オレ様かよ！』

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・神狩りを許す」

『はい、ありがたくやらせてもらいますゆえ』

カラスは、敬語でいい、敬礼をした。

そして、くるつ、と前に一回転すると、ポンツ、とはじけるようにして人になった。

真つ黒な髪に、ミヤと同じぐらいの背。黒いＴシャツと黒い半ズボンをはいている。

『ううゝ・・これ、嫌いなんだよな』

「ぐだぐだ言うな。ほら、オマエに渡す。動かないようにはしてある、オレはあいつらを黙らせる」

ミヤはそういい、風歌をカラスに渡す。言われたとおり、風歌は指一つ動かない。

『はあっ！？つたくゝゝ・・・・・・・・じゃ、これ、飲んでくれよ』

「・・・・・・・・オマエらは、今ここで始末する」

ミヤは右手をぎゅつ、と握り締めた。

「来るぞ！まず、外へ行け！ここじゃ、狭い！」

風黄らは、外に飛び出した。

「ほお・・・・・・・・？逃げられるわけが無いだろっ！」

ミヤは手を開いた。すると、

グワアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア

と、とてつもない気の球が現れた。

ピリピリと、体がしびれる。

「うわ・・・・・・・・何だ？この気は・・・・・・・・っ」

「これが・・・ミヤの力・・・」

エンとライトは呆氣に取られる。

「・・・腕をあげたな・・・っ！ミヤ」

「そうだ。オマエみたいにへらへらしてないんだ。・・・さ
つさと・・・死ね」

ミヤはそう言つて、強大な氣の球を投げた。

「くっ・・・」

真っ暗で何も見えない・・・。

エンとライトは眼を細める。そして、次の瞬間、少しだけ光が見えた。

そして、刹那、それは闇にと変わった。

「エン！ライト！氣で体を守るんだ！」

前方から声がした。

二人は瞬時に実行する。

ドガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア
アアアアアアンツツツ

大きな爆発を起こし、周りの建物や木は瞬時に吹き飛ばされたか、破壊された。

・・・・・・風黄っ！エン！ライト！

心の中で風歌は叫ぶ。

こんなやつ、動けたらなんとも無いのに・・・ていうか、驚
いてるし！

風歌はカラスを見たり爆発を見たりと交互に眼を動かす。

『ミ・・・ミヤ・・・死ん・・・だのか？』

すこし動揺しながらカラスは問いかける。

ミヤは、ふう、と息を吐いた。そして、

「まだだ、流石は光の神。瞬時にシールドを張り攻撃を防いだか・

・しかし・・・・」

ミヤはうつすらと笑った。

煙がようやく消えたころ、三人の姿は見えた。

風黄！？

エンとライトはかすり傷程度だろう。しかし、二人の視線の先には・
・

周りに、さまざまな綺麗な精霊を纏っている少年。

所々服が破け、肌が見えていて、微かに血がしみている。

周りの精霊たちは、楽しそうにくるくると回る。

「風黄・・・・」

「んあ？何だ？」

風黄はいつもと変わらない口調で返事をする。しかし、その眼はミヤからは離されていなかった。

「オマエ、それ・・・何だ？」

エンが聞く。

「それ？これ？ああ、この精霊か？光の精霊たち・・・・
・・・・」

「なになにそれ！」

「「？」はないでしょう、折角出てきてあげたのに」

「<そうだ、オマエ&後ろの二人がかすり傷・・・ま、オマエは例外として助かったのは・・・>

「<俺らのおかげだろ？？>

「<ちよっと、鈍ったでしょ？腕>

<そうね、ちょっと動きにくかったわ>
思い思いに喋る光の様に光る精霊。

全部で六人(?)

「ああ、ごめん。で、また仕事。今度は風歌を助けるんだ」

<風歌あ?ああ、あの子?いいよっ!>

<暴れたりないからね>

<よしっ、行くか>

<じゃ、わたしは二人の傷を癒すわ>

<あたしも行くわ!>

<俺らは、攻撃だな>

精霊二人はエンとライトの元へ行き、傷を癒す。

残った四人は風黄と一緒に風歌の元へ飛ぶ。

「ほお?飛べるようになったのか」

「当つたり前だ!」

「・・・キイティス!風歌は渡すな!」

『お・・・おうっ!』

カラス、キイティスって言うんだ・・・。って違う関心をしてどうするっ!あたしい!

キイティスは動かない(動けない)風歌を持つと逃げた。

<あつ、逃げたよ!>

<知ってる!どうする?風黄・・・?>

「・・・下手に攻撃すると風歌が危ないし・・・かといって攻撃しないでいると・・・」

風黄はちらり、と後ろを振り向く。

「逆に攻撃される」

風黄たちの後ろには、ミヤが手に気の球を用意しながら、追ってきている。

「どーするかな・・・?」

風黄は苦笑いを浮かべた。

が
・・。

『あつ』

「あつ」

<あつ>

「ん・・」

宙に浮いていたヤツらは、眼を大きく開けた。

その中でも一番驚いたのはキイティスだろう。

キイティス・人間バージヨンの腕にいた風歌の姿がない。ついでに、蒼い玉も。

それは、宙で舞っていた。

マジですかあああああああああつつつ！？

風歌は声にならない（むしろ、出せない）悲鳴を出した。

それは、キイティスが風歌と玉を落としたからだ。

「うわあああああああああつつつ！？風歌あああああつつ！？」

「あゝあ、落としたな・・」

風黄は空中で急ブレーキをかけ、精霊たちとともに風歌の落ちている場所へと向かった。

が、この世で一番最悪なことになった・・・と風黄は思った。

「くくく」

蒼い玉は消えた。

どこに？

モチロン、風歌の中に。

ゝ・ミヤ登場・ゝ（後書き）

見てくれてありがとうございます。

まあ、相変わらず下手な文章ですこと（人A）

そうですね、奥様 おほほほ（人B）

てな感じで呼んでくださる方もいるかもしれません。

一体どんな人なんだよ。

それでも、読んでくださった事には変わりはありません。それでは、さようなら。

「何もしていない、オレは。やったのは風歌自身だ」

「はあ!？」

「言ったとおり、今は体が飲んだ薬に反抗しているんだ。そのうちやむ、まあそのときには・・・もう判るだろ？」

「・・・・・・・・クツ」

「風歌!」

エンが風壁に火の玉を投げつける。しかし、簡単に消えてしまう。

「これは・・・・・・・・風歌の気全部か!？」

「そうだ、体全部を使って反抗しているんだ。しかし、それももうおしまいだな」

「ああああああああああああああああああああああああああああああああ!」

風歌が叫んだと同時に風壁は最大限にまで大きくなり、だんだん消えてきた。

しゅうつうつうつうつ・・・、と煙が立ち、やっとあたりがどうだか理解できるまでになった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・えー・・・ここは、寮だったよな？」

風黄が尋ねる。

「ああ、見事なほどにでかい寮だった・・・・・・・・・・・・・・・・・・はずだ」

「そうだな、オレもそう思う」

ライトに続きエンも言う。

それほど、あたりにあったものは全て消えていた。

寮は破壊され、その破片はどこか遠くへ飛ばされている。

緑が多かったこの場所は、見事なほどに汚れている。

軽く原爆が落ちたほどだ。

『ミヤ・・・・・・・・・・・・・・・・あいつ、生きてるのか・・・・？』
キイティスが恐る恐る聞く。

「きつとな」

『きつと……?』

「ああ」

『無責任な!』

「そうだな」

『ひいひいつ!ミヤこえーぞ……!』

「そうだな」

『普通に返すな〜!!』

「………黙れ……」

急に、ミヤはキイティスのくちばしを掴み、黙らせた。

「ふいふあ!?ふあにしゆるんふあ!?!」

(ミヤ!?何するんだ!?)

「風歌だ……」

ミヤの一言に、キイティス&呆氣に取られていた三人は黙った。

キシッ……と小枝を踏む音がする。

「………風歌?」

風黄が恐る恐る話す。そして、風歌がミヤの横を通ったその瞬間、

「
つ……!?!」

風歌が風玉を風黄の目の前に持っていき、寸前で止めていた。

「ふ………風歌………!?!」

エンが叫ぶ。

光がともっていた眼は虚ろだ。

「………殺す」

風歌はつぶやいた。

「………ミヤ、何した!?!」

「お前らを「殺せ」といったただけだ。キイティスも殺っていいぞ」

『マジ！？やったね！』

キイティスはどこから出したのか、剣をもって襲い掛かってきた。風歌も風玉を連発している。

「うわぁっ！風歌容赦ねーなー！」

「んなこといつてる暇があれば逃げろー！」

三人は攻撃をよけながら逃げていく。

「追いかけるぞ」

ミヤの合図とともに、二人＋一匹は三人を追いかけた。

「くう・・・・・・・・・・！楓！松！出て来い！」

風黄が叫んだのと同時に、二人の精霊がぼんつ、と出てきた。

「ナンですか??」

「風黄」

「アイツらを止めるんだ！」

『仕事?』

「そうだ」

『まかせて！行くよー!!』

楓と松が叫んだ途端、地面がゆれた、と同時にひびが入り、割れた。そのヒビは風黄たちとミヤたちを完全に引き離した。

「今のうちだ、少しでも逃げるんだ！」

そして、三人は瓦礫の中に隠れた。

「チツ・・・・・・・・見つけにくいところに・・・・・・・・」

ミヤはつぶやいた。

「・・・・・・・・大丈夫、殺れる」

風歌は、うつすらと笑いを浮かべた。

「さつさと、殺して、あげる」

手を上げたたん、凄まじい風が起こった。

ゝ。・危険：。ゝ（後書き）

見ていただいてうれしく思います。
これからもよろしく願います。

く。・光の失われた眼。く

ゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
ツツツ！

風は辺りを飲み込む。

瓦礫の上のほうは、風によって飛ばされている。

「おいっ！どうするんだ！？風黄！」

「エン、黙れ。オレらの上の瓦礫がいたら他のところに逃げるんだ！」

「しかし、どこに？すでに建物という建物は破壊されているぞ」

「・・・・・・攻撃か？」

風黄の案に、エンは、

「風歌は？どうするんだ？まさか、あいつごと・・・・・・？」

「・・・・・・出来ればオレだってやりたくねーよ。けどな・・・」

「

風黄は、瓦礫の間から見える風歌を見た。

すでに、光を失った綺麗な眼の先には、風黄たち。

横に、ミヤとキイティス。

「攻撃しないで助けるって言うのは、きっと、難しいだろ？むしろ、無理だ」

「そうだな・・・・でもよ・・・・」

「しつこい。無理と叫ぶたら無理だ」

ライトがエンに向かって言う。

が、急に暗かった場所が明るくなった。

『・・・・・・い？』

三人は恐る恐る、顔をあげる。

「ひい・・・・」

「うわ・・・・」

「最悪なことになったな」

そこには、につこりと、しかし、極悪な笑みを浮かべている風歌がいた。

手にはモチロン、風玉つき。

「に・・・逃げる!」

三人は風歌を突き飛ばし、逃げた。

「・・・・・・・・・・逃がさない・・・特にエン!」

「何故に!? て、うわっ! オレだけ狙うな ツツツ!」

「死ね」

「嫌だ! て、うわっ!」

「・・・・・・・・・・エンは何かしたのか?」

「風歌の気にさわることを少々」

「そりゃあ、エンの責任だ」

「マジ!? 光の神って噂じゃあ、困ってる人を助けるんじゃないの?」

「そうだな。でも、今は面倒だから」

「かみさま失格だ~~~~~!」

「ごたごたうるさい」

「ひいひいっ!」

「つたく~~~~・・・・・ほれ」

「ぎゃあああ! ちよいま面白い! 目の前で何かを爆破させるな! やるなら俺の後ろで!」

「すまん。でも面倒だから」

「またかよ!」

「うるさいぞ。特にエン」

「何もかも信じられなくなっちゃったあああああっつ!」
頭を抱えて逃げるエン。

「たつく~~~~・・・・・置いてくぞ」

「ごめんなさい、待ってください」

三人は、逃げて逃げて逃げまくった末、
「行き止まりっ!」

になった。

「よ．．．ようやく．．．追いつい．．．た．．．」

風歌は息を切らしながら言う。

「あんまし説得力ないよ風歌」

「うるさい！もう、死んじやえ！」

ぽぽぽぽぽぽぽ、と連続で風玉発生。

が、それをあつさり、三人は交わす。

そして、それぞれにちからを発揮させる。

風黄は、六人の精霊。エンは炎玉。ライトは手に電気をためている。

「何？攻撃するの？風歌を？」

どこからか現れたミヤが面白そうに言う。

「ミヤ．．．お前のせいだ！」

「そうだったか？」

エンは空中でパーカーのポケットに手を入れて浮いているミヤを見る。

ミヤはとぼけたように肩をすくめる。

「殺れよ、さつさと」

面白そうに言うミヤ。

と同時に風歌も走り出す。

今度は、手に風を巻いているかのように手を中心に風が音を立て、回っている。

そして、三人の目の前に来て、地面を思いつきり殴った。

風圧で地面が二・三メートルへこみ、土が三人のほうへ飛ぶ。

すると、三人が一気に駆け出し、風歌へ攻撃を仕掛けた。

精霊たちは、風歌を拘束し、エンが炎玉を投げ、ライトも風歌がやったように地面を思いつきり殴る。すると、ひびが入った。同時に精霊たちが風歌を離し、風歌はその中に落ちた。

「ッ！」

風歌は間一髪で地面を掴む。

「ホントにやったな」

ミヤは驚いているのか、面白がっているのか判らない口調で言った。
「ふう、成功だ」

風黄は安堵のため息をつく。

「そうだな、これでしばらくは時間が稼げる。・・・エン、何している？」

ライトの眼には、エンが風歌のいる穴を見ている風景が映った。

「いや、別に」

しかし、その眼はしつかり風歌を見ていた。

それを見た風歌は一度、顔を下に向け、にやりと笑った。そして、

「お願い、エン・・・・・・・・・・助けて」

突然、前の風歌と何も変わらない口調で言った。

眼は光が宿っていて、涙まで浮かべている。

今まで風玉があつた手は震えている。

「ふ・・・・・・・・風歌？」

エンは恐る恐る聞く。

「うん、そう。あたしだよ、風歌だよ」

風歌は優しい笑みを浮かべる。

「エン！惑わされるな！」

風黄が叫ぶ。

「酷い。ねえ、風黄の言うことなんか嘘よ。あたしは本当の風歌。

助けて、エン。この穴から出して！」

風歌はエンに向かって言う。

「エン！そいつは風歌は風歌でも今は殺人鬼だ！」

「エン、助けてよ。怖いよ・・・・・・・・寂しいよ・・・・・・・・ねえ、エン、

お願い！」

「エン！」

「お願い、此処から助けて！」

エンはぐっ、と拳に力を入れた。

そして。。

「エン・・・・・・・・・・？」

声を出したのは 風黄たちだった。

「エン、ありがとう！助かったよ！」

風歌はエンの手を借りて大地に上がってきた。そして、

「お礼に・・・・・・・・」

手に風玉を作った。

「！？エン！逃げろ！」

「！？」

「お礼に、殺してあげる。 あたしを助けてくれた“馬鹿な神様”」

風歌が極悪な笑みを浮かべたと同時に、風玉は変化し、刃になった。そして、それは鈍い音を立てながら、エンの腹部に突き刺さり、貫通した。

「ツツツ・・・・・・・・！！？」

エンは、眼を大きく開け、風歌を見た。

風歌の眼は光が宿っていない。

「ホント、バカ。可笑しい」

風歌はそう言い、笑った。

「う・・・そ・・・だったの・・・か？」

「そう、完璧な嘘。あの時、風黄たちの言うことを聞いてればよかったのに。ていうか、普通信じる？」

風歌はそっぴい、エンにそつと触れた。

「バーカ、ホン・・・ト・・・」

風歌の言葉は最後のほう、途切れた。

「・・・風歌・・・？」

そして、小さく言った。

「ゴメン・・・きつと助けるから」

「・・・？」

エンが痛みに絶えながら、風歌の顔を見ると風歌は唇をかみ締めていた。

「ちよつと、聞いてくれる？」

風歌は小さくエンに耳打ちすると、優しく笑った。

「んじゃ、よろしく」

眼には本物の光が宿っていた。

ゝ。・光の失われた眼：。ゝ（後書き）

見てくださってありがとうございます。
これからよろしく願います。

ゝ。・いぢめでしょ。。ゝ

風歌は立ち上がると、“演技”を始めた。
エンも出来るだけ知らないフリをする。

「風歌・・・」

ライトは怒りに体を震わせていた。
顔には出さないが、風歌は心の中で泣いていた。

人は殺さない。

そう、心に決めて、そうやって生きてきた。
けど、今。殺しそうになった。
大切な友達を。

そんなことだけはあつてはいけない。

だってさ、人が死んだら哀しいじゃん？

いつか、誰かに言ったことがある。

風歌は、操られているフリをしながら、風玉を出す。
遠くで、ミヤとキイティスが見ている。

バレないように・・・。

しかし、その思いとは逆に、

「神にはやっぱり、効かなかったか」

ミヤが小さくつぶやいた。

そして、ため息を一つついた。

そして、風黄もうつうつと感じていた。

アレ、演技だ。

と、こっそりライトに耳打ちする。

ライトはゆっくりうなづく。

そして、この戦いは“演技”の戦いになった。

「演技、どうだ？」

「はつきりいわなくてもにがてだ」

「演技嫌だなあ・・・面倒」

「演技の前に傷をどうにか・・・」

「演技はうまいってことにでもしとくか」

神候補五人は、愚痴をはいている。

しかし、ミヤの横でキイティスが理解を出来ていないようだった。

「でも、楽しめそう・・・！」

「一丁やりますか」

「そうだな」

「傷を・・・」

四人は違う意味で楽しんでいた。

「つまらない」

ミヤはつぶやいて、消えた。

「あ、ミヤ！」

キイティスも続いて消える。

「ミヤ、消えた？」

風歌が問いかける。と、その瞬間に、

「戻った

ツツツ！

！！！！」

風歌が叫んだ。

そして、伸びたりいろいろな動作をする。

「エン、治ったぞ」

いつの間にか、精霊により、エンの傷は消えていた。

そして、風歌が三人のほうを向いた、そして、

「ごめんっ！」

頭を下げて、誤った。

「不注意だったよ、まさか、飲み込むとは思わなかったの！」

「オレも」

「同感」

「もちろん」

「で、まあエン、大丈夫だった？そのときまで意識なかったから、攻撃した後、治った！」

「まあ、痛かった」

「本能にはかなわなかったか・・・」

「そうだね、んでもってついで！遊ばない？」

この遊ぶとはこうなる。

遊ぶ「神同士」練習の戦い

「楽しそうじゃない！？」

まるで反省の影も見えない言い方に、風黄は、

「じゃ、風歌に不利なところでやろう」

と一言。

「・・・・・・・・・・・・・・・・マジ？」

と風歌。

「賛成！」

「右に同じ」

とエンとライト。

「そのほーがオレらのに楽しいし」

「あたし的につまらないし」

「多数決で決めよう！賛成の人！」

「あつ！ひどい！」

もちろん、三対一で風歌は負けた。

「くううつ！ひどい！このばかつ！」

「じゃあ、行くぞ」

「あ、無視！」

「よし、扉開いたぞ」

「あ ツツツ！無視！？やっぱり無視ですか！！

？」

と言ってる内にも三人は扉の中へ。

「フンッ、だ！ってひいっ！このロープは何！？」

手首に巻かれたロープによって、風歌は無理矢理扉の中に引き込まれた。

「あたし、ここ嫌い」

「だからだよ」

「うわーお」

「風歌にとつては・・・・・・・・」

「だからよ！ここはミシャーラの中でも風が吹かない特殊な場所！風の神のあたしにとつては苦難中の苦難よ！」

「よし、やるか」

「無理！絶対絶対無理！」

「じゃあ、はじめるカウントダウン5・4・・・」

「無視かよー！！」

「3・2・1・0ー！！」

「みんなあたしを狙うな！狙いやすいかもしれないけど！」

風歌は上空にとびがる。

「試しで・・・」

風歌は風玉を出そうとするが、ぽすつ、とマヌケな音を出して消滅した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・だあ

ツツツ！」

風歌はとにかく逃げた。

「逃げ足だけは速いな」

「そうだな」

「ついでに、エイ」

「どはっ、風黄！何すんだよ！」

「攻撃」

「ついでにオレも」

「ライトおおおおおおおっつ！」

「よしっ、今のうち・・・」

風歌はすたこらと逃げ続ける。とにかく逃げる。猛スピードで逃げ続ける。

「あ、風歌が逃げた！」

ココに来ていじめる標的がいつの間にか変わっていた風黄たちが風歌を追いかけ始める。

エンが小さく、安堵のため息をつく。

「きゃ 気づいた！！！！！！！！！！」

風歌は叫び、岩陰に隠れた。

すると、突然、風歌のいる地面がぐにやり、と揺らいた。

「へっ？」

声を上げると同時に、風歌はゆらいだ地面の中に落ちた。

「

ッッッ！」

悲鳴を上げる暇もなく、風歌はその場から消えた。

岩陰をのぞいた風黄たちは

「あ？消えた？出てくるところ見たか？」

「見てないぞ」

戸惑い、辺りを見回した。

「つたたたたたた．．．．．」

風歌は尻を押さえながら、立ち上がる。

「つたく．．．．．一体何が起ったの．．．？」

「そ．．．．．それはこっちのセリフだ．．．．．早く降りろ．．．」

「ん？．．．．．地の神！えっと．．．．．」

「ダイチだ．．．．．ていうか早くドケ！」

「あ、ごめんごめん」

風歌は本当に誤っているのかわからない声で言う。

下敷きになっていたのは、地の神　ダイチだった。

「ていうか、なんでイキナリ落ちて来るんだよ．．．．．ここは、オレしか知らない場所なのに」

ダイチは軽く不満を漏らす。

「さあ？この上にいたら落ちた」

「．．．．．」

ダイチはそこに手をやる。

すると、ぐにゅん、と手が中に入った。

「たしかに．．．．．」

ダイチはそういい、手を抜く。そして、土玉を投げつける。

土玉はべちゃ、とつぶれ、その場所を固める。

「これで大丈夫だな．．．」

ダイチは、ほつ、としたように顔をほころばせる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

初めて、風歌はダイチの自然な笑みを見たような気がした。

ダイチはいつの間にか、いつものような物騒面になっていた。

「オマエ、帰り方教えてやるから帰れ」

言い方が多少きつかった。これにむつ、とした風歌は・・・

「嫌！」

胸を張って答えた。

「は？」

「だってこのまま出て行ったら、あたし死んじゃうし！」

「はああ!？」

「風黄とかエンとかライトとか!」

「風黄??」

「うん、人・・・・・・・・・・ぢゃあないね。光の神だよ」

「光の神いいいいつつ!？」

「うん」

「うん、じゃねーよ・・・・・・・・大変なことになるぞ・・・」

「そうなの？」

「ああ」

「へえ・・・・・・・・」

「ところで、何故にオマエたちはこんなところに?しかもオマエにとつちゃあ、ここは苦難の場所だぞ？」

「そうなんだよ、聞いてよ!!」

「何を」

「話を。実はさ、まあいろいろあってさ、罰ゲームでここで戦うんだよね、遊びで」

「え」

「あたしがまあ、ちよつといろいろ起こしたんで、あたしに不利な場所で戦おうとするんだよ！？酷いよねー！！」

「オマエが何かやったならオマエの責任だ」

「ぐっ、コイツもあたしの敵……」

風歌はダイチから一・二歩下がる。

「あ・・」

ダイチが小さく声を上げた。

「何？つてええええええええええ！？またああつ！？」

風歌はまた、穴に落ちた。

「風歌！」

ダイチは慌てて追うために穴に飛び込む。

「ふふふふふふふふ風黄ふふふふ！」

「な．．．なんだ．．．？」

珍しくライトが驚いている。

その理由。

急に人の手が土から出てきたからだつた。

これは、ダイチが土の状態を確かめるために出した手だった。しかし、何も知らない三人にとっては、衝撃のことだった。

ばっしや
んっ

と、水に落ちる音が二回連続でなる。

しばらくして、水面に二つの頭。

「ぶはっ！」

「お・おい！大丈夫か？」

ダイチが風歌のもとへ泳いでくる。

「う・うん、なんとか」

しかし、かなり高いところから落ちた風歌たちは相当な衝撃が来ているはずだ。

ダイチは力で衝撃を和らげたとしても、力が使えない風歌にとって
はコンクリートに叩きつけられたようなものだ。

「痛い・・・」

風歌はつぶやくと、水の中に沈んだ。

「あ、おい!？」

ダイチは慌てて、岸に風歌を引き上げると、壁に寄りかからせた。
二人ともびしょびしょでこれだったら風邪を引くこと間違いなしだ。
しかし、乾かすにも、火はないし、風で乾かそうにも風の神はダウン
しているし、その前にここでは風が使えない。

危険。

一瞬にして、ダイチの心に不安が広がる。

しかし、ぶんぶん、と首を振り、冷静に考える。

「まず、コイツの服をどうにかしないと・・・・・・・・」

かといって脱がしたら変態だ。

「うっわ・・・・・・・・」

更に最悪なことに、ここは先日の大雨（ミシャーラにも雨は降る）
でこの川は氾濫していた。何故その中で泳いでこれたのかと言う疑
問は浮かんでこなかった。

水が岸を飲み込むのも時間の問題だ。

「ま、とにかくオレの服ぐらい乾かしとこう」

ダイチはそう言ってきていたＴシャツを脱ぐ。そして、Ｔシャツを
絞る。だばだばだと水が垂れてくる。そして、パンパンッと宙で

「風歌！」

と声がした。

そして、同時に、鉄砲水のように襲い掛かってきた水が何かによって防がれた。

「……風黄ってヤツか……」

「ダイチか？」

風黄は両手を前に出し、結界を張り、水を防いでいる。

「本当に……光の神だったのか……」

「まあな……それより、エン！ライト！早く来い！」

「おうよ！」

「判っている！」

声がしたと同時に、すたっ、と目の前に二つの影が降りてきた。パチパチッ、という音から、一つはライトだと言ったことが判る。もう一つは、紅く燃える炎からしてエンだということが判る。

「エン！こっちきてくれ！」

ダイチは叫んだ。

「判った！なんだか判らないけど！」

エンは叫び返すと、急いで二人の下へ行った。

「エン、とにかく暖めてくれ」

「んあ？って風歌！？すげー熱……」

エンは言われたとおり、手に最大限の炎を出す。

それによって、服などは瞬時に乾き、同時に体を温めてくれる。

「助かった」

ダイチはそうつぶやくと、風歌を地面に寝かせた。

一方、風黄とライトは、水をとにかく押し出す。

とにかく下流に水を流す。最大限の力を使って押し出す。

ドバアアアツ、と水が下流に向かって流れ出す。

「なあ、ライト」

「なんだ？」

「下流のほう……」

「？」

「大変なことになるな」

「気にするな」

ようやく水がおさまったので、二人は力を使うのを止めた。

「おい、風歌……生きてるか……？熱は上がりっぱなしだけど」

エンの声が聞こえた。

「熱？」

風黄たちが駆けつけると、顔を真っ赤にした風歌が寝ている。

「治せるか」

風黄はつぶやいた。

「治せるのか？」

ダイチが聞く。

「ああ、そりゃ、もう完全に」

「じゃあ、やってくれ」

「判った」

風黄は風歌の前に来ると、右手に気を集中させた。

すると、魔法陣が出てきて、まるで波紋のように、広がっていく。

そして、それを風歌に向ける。

「お……おい、風黄……？それは……まさか……」

「どうしたんだ？ライト」

「……………これは、自分の気を与えるときに使う技だ」

「？体の調子を治せばいいじゃねーか」

「ばかか。オマエは。ここは、風が使えないだろ？」

「ああ」

「それは、風の神の気を外に出すからなんだ」

「気を外に？」

「ああ、だから風歌の気を回復させれば……………」

「難しいことはパス」

「馬鹿だ」

「ん？なんか言ったか？」

「いや」

一方、風黄は向けたまま、突っ立っていた。

「……………はあ……………あ、三人とも。後は頼んだ」

『は？』

言った瞬間、魔方阵から数本の光の糸が出てきて、風歌を包み込んだ。

そして、カツ、と二人を光が包んだ。

「あ、おいっ！言っとくぞ！すべて与えるなよ！」

「……………むり」

「ふざけんな〜！！」

「……………」

返事が無かった。

「流石、光の神……………やることが半端じゃねーな」

「関係ない、まず、いつ終わるんだ？」

「さあ？」

しばらくして、光が収まった頃。

「ちょ、え！？あ、ふ、風黄iiiiiiiiiiiiiiiiiiiiいつっ！？」

風歌の叫び声が聞こえた。

「どうした！？」

「あ、え、う、い、お、あ……………」

「ちゃんと話せ！」

「ふ、き・・・・・・・・・・・・・・・・風黄が・・・・・・・・きつ・・・・・・・・消え・・・・・・・・消えた！」

「何で!？」

「わ・・・・・・・・わからない!けど、消えた！」

「はいいいいいっ!？」

風黄は真っ暗な闇の中にいた。

「まいったな・・・・・・・・」

風黄はつぶやいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・風黄か・・・・・・・・」

ミヤはその闇に溶け込むようにいた。

「ミヤか・・・・・・・・ここはどこだ？」

「世界の狭間」

「世界の狭間・・・・・・・・・・・・・・・・」

風黄はそう言っであたりを見回した。

すべては真っ黒な闇。

何も無い。

光も何も無い場所だった。

．．．．．か：

「　　　っっ！」

風歌は突然、顔をあげた。

「どうした？」

「え、あ、うん、まあ．．．」

曖昧な返事にエンは首をかしげる。

．．．．．うかつ．．．

まただ。

「ねえ、今なんか声聞こえなかった？」

「声？聞こえないぞ」

ダイチがいい、エンもライトもうなずく。

「？」

．．．．．ふうかつ！

聞こえた。

ちゃんと聞こえた。

「今、聞こえた……こつちだ！」

風歌は声がした川の上流を目指す。

「あ、風歌！」

慌てて三人も追う。

が

ひゅう……。

『ん？』

四人は走るのを止めた。

「あれ？え？待って、ねえ、こつて、風……吹かないんじやなかったっけ？」

「ああ、そうだ。この辺りは一切風が吹かない」

「でしょ？なのに……」

バランス……崩れ……た……。

「　　っ！．．．もしかして．．．風黄？」
「！風黄！？」

そう．．．だ．．。

「風黄なのね！？今どこ！？むしろこの風は何！？」

だか．．．ら．．．バラ．．崩れ．．た．．。

「何！？バラ崩れた？」

バランス．．崩れた．．

「バランスが．．崩れた？」

「バランス．．．？なんのだ？」

世界．．．．．の．．．

「世界のバランスが崩れた？そりゃあ、大変よ」

ミシャーラ．．．．．でも．．．怪奇．．．現．．．
象起こって．．．．．る

「ミシャーラでも怪奇現象起こってる」

すでに、風歌が三人に伝える役に就任している。

ミヤ．．．．．狙いは．．．命．．．精
．．靈

「ミヤ．．狙いは．．．命．．．精霊．．？」

「ミヤの狙いは．．．．．命の精霊！？」

ライトがそれぞれの単語を組み合わせ、言葉を作る。

早く・・・守るんだ・・・命の精霊・・・

「早く、守るんだ、命の精霊……？」

[illegible]

聞こえた。

近くで。

風黄の叫びが。

!

四人が瞬時に後ろを振り返ると、そこにはただの光があった。

それは序所に大きくなり、四人を飲み込んだ。

見えたっ！

風歌は心の中で叫んだ。
光の中に、風黄がいた。

今だ。

思ったと同時に、発動した。
事前に仕掛けておいた、風紐^{かせひも}を。

ガシッ

と、風黄の腕を掴むと同時に、残りの三人にも秘密で仕掛けておいた同じ技が発動し、引き止める。

「！風歌！？」

「風黄！」

風黄はひどく動揺していた。

「離せ！風歌！死ぬぞ！？」

「知らない！じゃあ、一緒に来なよ！」

「無理だ！早く行け！」

風黄はこれまでにないように怒っていた。

「風歌！」

風黄の怒鳴り声に風歌は一瞬緩んだ。

しかし、すぐに力をいれ、とにかく離れないようにする。

「風歌！いいか！？これは……」

風黄の言葉が言い終わらないうちに、風歌は力を振り絞って、三人を引き寄せた。

「エン、ライト、ダイチ！とにかく、風黄の動きを止めるのよ！」

「な・・・なんだかわかないが・・・」

三人は、風黄の腕や足を力によって押さえつける。

「あ、おい、うわ、倒れる!？」

言ったと同時に、風黄は倒れた。

そして、周りの光も消えた。

「ったく・・・、一体何のつもりだよ・・・つか、せ
つかく力使ってオレ以外をここに連れて行こうとしたのによ・・・」

「なんで、風黄は行かないの？」

「・・・ま、いろいろあつてな」

「じゃ、そのいろいろを教えて」

「・・・あ」

『え?』

風黄が指差した先を見た四人。

その隙に、風歌たちの力の技を破壊し、逃げた。

「あ、騙したな!？」

「騙されるほうが悪い!」

「追いかける?」

「もちろんよ、それに風が使えるとなると、こつちのものよ」

風歌はにやり、と笑うと、風黄の行く先を風の刃でふさいだ。

煙を立てて、風黄は進む方向を変えた。

そこを、ダイチが地面を盛上げて行く手をさえぎる。

続いて、ライトが風歌のように行く手を塞いだ。

エンは行く手を燃やす。

「ったく・・・」

風黄は諦めた様に、ため息をつく。

そして、風歌たちのほうを向いた。

そして

「ばーか、光の神がこんなんできてたばるかっての〜！」

急に、すべての技が瞬時に消された。

!?

そして、先ほどより速いスピードで逃げ始めた。

「力を使っても消される……だったら……？」

ダイチの問いに、風歌は

「もちろん、力づくで」

にかつ、と笑う風歌。

「諦めたか？」

風黄は建物の上から四人を見る。しかし、四人の姿はどこにもなかった。

⌈
•
•
•
•
•
•
•
•
•
•
?
⌋

辺りを見回すと、武器庫にいる四人を見つけた。

「武器庫……」

武器庫から出てきた四人は、それぞれ武器を持っていた。

風歌はロープとナイフ。エンとライトはそれぞれ銃を二丁ずつ。ダ

イチは斧。

やめてくれ

ツ
ツ
ツ
ツ
！

一体何をやる気だ

ツ
ツ
ツ
!
!

風黄はぞおつ、とする気持ちを抑える。

でも、その武器だけではオレに勝てない。

そう確信した風黄は念のために回りを確認する。

「あ……………」

・・・」

この確認は正しかった。

水の神、ウオウがいた。

「・・・・・・もしか、命の神候補？」

ウオウが風黄に問いかける。

「・・・・・・」

次の瞬間、風黄は迷わずその場から逃げた。

「あ、そうなんですネ!?」

ウオウも追いかけ始める。

「ウオウ? どうした？」

「命の神候補発見したんです!」

「何!? 命の神候補!？」

叫んだのは空気の神・ジエス。

二人して風黄を追いかける。

しかし、地面に降りてきた風黄を待ち受けていたのは、もちろん、あの四人であって・・・。

最終的に六人に追いかけられる風黄であった。

「つたく・・・なんでこんなことに・・・」

猛スピードで走りながら考える風黄。

とにかく、今は捕まったら終わりの鬼ごっこをどうにかしないと・・・。

風黄は振り返り、何かをつぶやいた。

すると、地面が盛り上がり、行く手をさえぎった。

「！？ダイチの技を・・・」

続いて、風黄は二回何かをつぶやいた。

すると、炎と水が六人を襲った。

「今度はエンとウオウの技・・・！？」

そして、また二回つぶやく。

稲妻が走り、急に六人のいる場所の空気が薄くなった。

「！ジェスとライトの技・・・！じゃあ次はあたし・・・？」

風黄は最後につぶやいた。しかし、それは六人にも聞こえた。

「我が命をかけ、六人を守り続ける」

技の呪文ではなかった。

「我が命？・・・・・・・・・・・・・・・・って・・・・ちょ、あ、え、
ふ、風黄！？」

遅かった。

風黄は消えていた。

いや、正確に言えば　消滅した。

風黄はもうこの世に存在しない。

命をかけ、守るため。

守りたいものがあるからこそ、自分の命を懸けた。
六人の体に、刻まれたそれぞれ司るものの形。

オレにとつちや、オマエらは失いたくないモノだから。

風に乗って聞こえた。

「バカな話・・・・・・・・・・」

風歌はつぶやいた。

風黄があたしたちを失いたくないものモノだったら、あたしたちは
風黄を失いたくないモノなの。

一緒なの、皆。

ほかの五人も、意識がないようにぼーっ、と突っ立っている。

やっぱ、風黄はバカだ。

風歌はキツ、と虚空を睨む。

今度会ったら叩きのめしてやる！

変なことを心に決めて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5338a/>

～。・風の歌・。～

2010年10月8日12時40分発行